

ホームスクール実践記

Index

Part1

- 【1】ホームスクールって何？
- 【2】教育方法の選択
- 【3】人類の教育史
- 【4】ホームスクール制度？
- 【5】親が先生役？
- 【6】社会性について
- 【7】4歳～7歳～14歳～

Part2

- 【1】石の上にも三年
- 【2】燃え尽き症候群
- 【2】体験者の感想
- 【3】きょうのランチ
- 【4】ホームスクール論争

Part3

- 【1】子どもが不登校になったら
- 【2】カウンセリング
- 【3】親が出来る事
- 【4】そっとしておく期間
- 【5】再び外へ出る
- 【6】きょうだいの反応
- 【7】命にかかわること

Part4

- 【1】障がいのある子どもとともに学ぶ
- 【2】米国サポートシステム
- 【3】米国 17歳の少女の体験
- 【4】1人で悩まないで！
- 【5】きょうだいのこと
- 【6】欲しい！公的プログラム

Part 1

【1】ホームスクールって何？

子どもを学校へ通わせることなく、家庭で親が教育をすることをホームスクールと言います。

「学校へ通わせなくていいの？」

「お友達はどうするの？」

「勉強はだれがみるの？」

「将来はどうするの？」

「法律で許されているの？」

「親が選んだの？ だったら子どもの気持ちは？」

「子どもの選択？ 子どもにそんなこと決められるの？」

「近所の人はどう思っているの？」

「同居の家族はどう思っているの？」

「ご主人はなんて言っているの？」

学校が当たり前の日本では、ホームスクールと言う考え方は、斬新かつユニークなため、理解するまでにちょっと時間がかかるかもしれません。

話はちょっと変わって、実際にホームスクールをしている子どもたちや家族はどう思っているのでしょうか？

子どもたちの感想

「自由な時間があって楽しい」

「ホームスクールは、考える時間がたくさんある」

「大きくなったら、自分の子どももホームスクールで育てたい」

「まわりの人の考えにふりまわされるのではなく、自分で決めることが大切」

ホームスクールをしている家族を見ての感想

「家族同士の仲がとてよいのがホームスクールの特徴」

親の感想

「ホームスクールを通して、子育てのこと、教育のことについて考えるだけでなく、自分の生き方も考え直したり、みつめなおすいい機会になった」

「子どもがこんなに楽しいとは思わなかった」

「いつもいいものを子どもに見せてもらっているという感じ」

「いろいろ迷いはあったけれど、子どもに、『ホームスクールをしてくれて、ありがとう』と言われて、本当にうれしかった」

日本でホームスクールをすることは、勇気のいること。でも、それでも家族はホームスクールを選択し、そして、とても満足しているのです。

【2】教育方法の選択

教育にはいろいろな手法がある

子どもの教育 すなわち 学校と思っている人は多いのではないのでしょうか？ ですが、本当にそうなのでしょうか？

実は、教育にはさまざまな手法があります。例えば・・・

- ・ ホームスクール = 手作りの家庭教育
- ・ 家庭教師によるマンツーマン教育
- ・ フリースクールのように、特別なカリキュラムがない通学式の学びの場
- ・ 学校
- ・ 通信教育

ホームスクール

ホームスクールは、親が自ら子どもに何を学ばせたいのか考え、それを親が実行する教育です。教師役は、親だけでなく、習い事の先生や、地域の人々と幅広い選択があります。教材も、書店で売っている参考書やドリルだったり、お母さんの手作りだったり、図書館の本や新聞、通信教育用の教材だったりします。

家庭教師によるマンツーマン教育

歌手や映画子役のように仕事があったり、スポーツ選手のように日中練習や海外遠征が多かったり、病気のため、学校へ通えない子どものために、親が家庭教師を雇って教育をしています。海外では、ホームスクールと自称している家族が多くを占めます。

フリースクール

決められた時間割や単位制度がなく、子ども達の希望や自主性に応じて学習が進められます。

学校

決められた時間割や単位があり、計画に沿って学習を進めていきます。教師と呼ばれる専門家のもと、講義式で授業が行われます。

【3】人類の教育史

教育の歴史

学びのあり方を歴史で追っていくと、人類の歴史が始まって以来、子どもたちは、親や周りの大人から生きるための知恵や知識を授かってきました。

数百年前からは、裕福な家庭では、家庭教師を雇い、マンツーマンで子どもを教育する

ようになります。

1900年代になると、ひとりの教師がたくさんの生徒を系統だって効率よく教えることができるよう学校が設立されるようになりました。

1990年代頃でしょうか、一律的な教え方に合わない子ども達が増え、いじめなどの問題もあり、親や行政がフリースクールを始めるようになりました。

2000年前後から、学校制度に疑問をもったり、教育本来のあり方である親が子どもに教育をするという考え方に賛同した親達が、インターネットや通信教育、図書館、市販の教材などを利用して、ホームスクールを始めるようになりました。

将来的には、ホームスクール、フリースクール、学校が融合した形の教育が生まれると予想されます。

狩猟や農耕生活
親や共同体が
子どもを教育

豊かな家庭（武士や商人）
家庭教師

大量生産社会
学校

ホームスクール
親や共同体が子どもを教育

【4】ホームスクール制度？

ホームスクールには決められたシステムはない

ホームスクールの最終的な目標は、子どもが周りと共に生きながら、社会で自立して生きていける事です。学校教育は、小学校、中学校で義務教育終了、高校、専門学校、大学というように、制度がありますが、ホームスクールにはそれがありません。

ホームスクールは、何歳からスタートするかですが、各家庭によって異なります。小学校入学年齢の6歳からとする場合もあれば、4歳、あるいは、なかには赤ちゃんのときからという親もいます。親達が、「今からホームスクールをはじめよう」と思ったときから、ホームスクールはスタートします。

ホームスクールには、小・中・高校の区別はありません。

ホームスクール卒業年齢も、特にありません。幼稚園も学校も行かずにずっとホームスクールで過ごし、その後、就職したり、高校、大学、専門学校に通う人もいます。子ども時代の数年間をホームスクールで過ごす人もいれば、学校とホームスクールの間を行ったり来たりする人もいます。

ホームスクールの終了証明

ホームスクールは、学校に在籍をしていれば、その学校の卒業資格取得対象者になります。その場合、ホームスクールを卒業したという事ではなく、学校を卒業した事になります。

高校に入らずにホームスクールをした場合、卒業証明というものはありません。大学への進学を希望する場合は、その大学に入学するための条件に合うよう、学習成果を示す事が必要となります。

【5】親が先生役？

学校の先生でも、子どもひとりひとりの学習能力を伸ばせない

教師を目指す人たちは、大学で、先生になるための勉強をたくさんします。専門分野の勉強や、教育の歴史、教育哲学、そして、教育実習があったりします。

教師として採用されると、教室の教壇に立ち、30人近い子どもたちをいっせいに教えはじめます。でもすぐに、授業についていけない子どもたちが、必ずクラスに何人かいることに気がつき始めます。適切な指導をしてあげたいのだけれど、多忙な新米教師には、次々と問題につまずく子どもを教えるだけの技術がまだありません。

そうしているうちに、1学期が過ぎ、1学年が過ぎていきます。勉強から遅れた子どもは、不安を抱えたまま、あるいは、学習意欲を失ったまま、次の学年を迎えることになります。

では、ベテラン教師はどうでしょうか。文部科学省の調査で、小学校6年生の段階で、半数以上の子どもたちが、算数では授業についていけないという事実があります。

どんなに教師が努力をしても、どんなに知識があっても、学校が目標としているレベルに達しない子どもたちがたくさんいるのです。これは、教師の質の問題ではなく、教育システムそのものと、家庭文化の崩壊からきていると予想されます。

ゼロからスタートのホームスクールの親

ホームスクールでは、親が教師役と言われています。でも、教師になるための勉強をしたことがない親がほとんどで、いったいどこから手をつけてよいのかわからない状態で普通は、ホームスクールがスタートします。

子どもによっては、算数や漢字ドリルを親がやらせる場合もあるし、子どもが好きなことから取り組み、時期がきたら、科目ごとの勉強をやらせようかと、なんとなく考えている親もいます。

ドリルを選択した親は、まず、子どもをいすに一定の時間座わらせることからの挑戦となり、次にドリルを定期的にやらせる、つまり習慣化させることが最初の目標だと気がつきます。

ドリル好きの子どもなら良いのですが、そうでない場合は、親子双方、ストレスのたまる大変な作業です。

人類は自学自習で学んできた

ドリル学習をしても、まったくしていなくても、ホームスクールを何年かやっているうちに、親は、子どもが、教師なしで、自学自習していることに気がつき始めます。

それは、最初は、これを自学自習と呼ぶのかな？程度なのですが、さらに年月が過ぎると、人間は、歴史が始まって以来、自学自習で学んできたことに気がつきます。そして、学校のように、上から教えられて子どもが学ぶシステムは、ほんの50年の歴史しかないことにも気がつきます。

自学自習は、人間が本来もっている力です。人類は、自学自習によって、これまでの文化を築いてきました。火を使うこと、道具を発明し、使いこなすこと、畑を耕し穀物を育てること、狩をすること、布を織り服を作ること、すべては自学自習で行われてきます。

物を作ったり、採ったりするという生産的なことを自学自習する人がいれば、うたを歌う、楽器を奏でる、人のために祈る、人に笑顔や生きる勇気を与える、そんな精神的な生産をする人たちもいます。

その人たちもまた、自学自習で、自らの技術を伸ばしています。

自学自習ができないとき、それは、食べ物を得ることができない、体温を保つための衣服が作れない、周りの人々と生きる楽しさを共有できない、すなわち、生き続けることが困難になってしまいます。

江戸時代の人々の自学自習

江戸時代から、米や豆は、今と同じように相場場で売り買いがされていましたが、当時は、家庭の主婦や、子どもも、家計を支えるために株の投資売買をしていたそうです。

株の投資売買は、勘ではなく、過去のデータをもとに将来の数字をはじき出すため数学を使ったり、社会の動きを考察して行います。学校がなかった時代ですから、当時の女性や子どもは、人から教えてもらいながら、株の投資をしていたはずで

同じ江戸時代、解体新書が杉田玄白と前野良沢によって、オランダ語から日本語に訳されて出版されています。当時、オランダ語と日本語の辞書も文法書も何もなかったのだそうです。また、ふたりとも、オランダ語というものをまったく知らなかったそうです。

では、どうやって翻訳をしたかという、たまたまオランダ語のからだの名称について書かれたイラスト付きの本があり、そこから手探りで、ひとつひとつの単語を日本語に置き換えていったといえます。

これも、自学自習のひとつです。人は、必要に迫られて、自分から学んでいく生き物なのです。

エジソンも自学自習

エジソンが、学校から見放され、母親がホームスクールで育てたのは有名な話です。最初の頃は、母親が手伝っていたようですが、すぐに彼の好奇心は、母親の知識を越えてしまったと予想されます。

化学実験好きなエジソンは、畑で作物を育て、それを売ったり、電車の中で物売りをして貧乏な家の家計を助けながら、化学実験に使うための機材や薬、本を買い込んで、自宅で実験をしていました。かなり複雑な実験をしていて、あるときには、薬に引火し、家が火事になりかけたともいいます。

エジソンの実験も、母親の助けもなく、先生のアドバイスもないまったくの自学自習です。

子どもは、ひとりひとり全員が才能を持っている

アインシュタインやエジソン、松下幸之助といった、有名なホームスクール出身者の名前をだすと、こんな答えが返ってきます。

「それは、彼たちが、特別な才能を持っていたからだ。みんなにあてはまるわけではない」

特別な才能・・・それは、天才や大成功者だけがもっているのではなく、本当は、誰もがもっているものです。特別な才能は、その人が、生きていくために必要なことから、必ず誰もがもっています。

ある少女は、オリンピックを夢見て一生懸命に練習に励んでいました。でも、周りの選手たちは、少女よりもずっと上手でした。ですが、少女は、大人になったとき、金メダリストになりました。

なぜ、彼女が世界のトップに立てたのか？ 当時のコーチたちは、こう語っているそうです。コーチが話を始めると、グループの最前列にいつも目を輝かせて、熱心に話を聞く彼女がいた。技術的にはまったく目立たなかったけど、その一生懸命さに、心を動かされ、指導してきたと。

一生懸命な気持ち、努力、集中力、継続力、好奇心・・・才能がいくらあっても、これらの大切な要素がなければ、人はせっかくの才能を伸ばすことはできないのです。

「そうはいつでも、わが子に特別な才能があるとは思えない」

「何かあると思うけど、わからない」

もしも、親が、その子どもの才能がわからない、何も才能があるとは思えないと思ったら、それは、子どもに才能がないのではなく、親の感性が曇っているからです。

感性とは何か？ 親にとってのホームスクールのスタートは、人によっては感性とは何かを発見することから始まります。そして、親がホームスクールの教師役・・・そんなものは存在しないと思うのですが、になるための日々がスタートします。

学校型の学習方法を望む子ども

子どもの学習方法は、大人と同様、さまざまです。ドリル学習が好きな子どももいれば、学校の授業のように講義してもらうのが好きな子どももいます。

なかには、学校の学習方法のほうが好きだからと、ホームスクールを止めて学校へ戻っていく子どももいます。

ドリル学習は、子どもに合ったものを探すことができればいちばんいいのですが、子どもの好みに合ったものがなく、親が手作りすることもあります。手作り教材は、親が勉強したり教材を作ったりとなかなか大変なのですが、新しい知識を学んだり、子どもが喜んでくれたりと、その過程を親は楽しむことができます。

手作り教材は、多くの場合、その場限りのことになる可能性が高いのですが、やる気と必要性が一番高まっている時期でもあり、試してみる価値はおおいにあります。

子どもによっては、指導者が欲しいと思っている場合もあります。子どもの興味にこたえてくれる指導者が、そばにいてくれると助かるのですが、そうでない場合のほうが多

いかもかもしれません。

ですが、子どもが強くそれを希望し続けていれば、本当に必要な時期になれば、その機会が巡ってきます。これは、多くのホームスクールの先輩たちが語っていることです。

【6】社会性について

ホームスクールで社会性は育つのか？

学校に行かないで、家の中にいたのでは、社会性は育たないのではないかな？

この質問は、幼稚園数年間、小学校6年間、中学校3年間、高校3年間、もしかするとそのあと大学や専門学校で数年間と、人生の多くの時間を学校で過ごしたことがある人からの独特の質問です。

学校経験者たちはこう考えます。

- ・子どもは同年齢の子どもたちと一緒に育ち、学ぶことが必要だ。
- ・現代社会にとって、学校は、子どもたちの社会性を育む唯一の場である。（極端かもしれませんが、子どもたちは、学校で1日の大部分を過ごしていることから、他の場所で社会性を育むことは、困難となっています）

でも、学校がまだなかった時代に育った人たち、つまり、すべての人たちがホームスクーラーなのですが、その人たちからみれば、「学校へ行かないと育たない社会性って、本物の社会性なのか？」と問いかけられそうです。

学校へさえ行かせれば、社会性は育つのか？

学校へ行かせれば健全な社会性が育つと、人々は信じています。ですが、そうなのでしょうか？

たとえば、私たちは、こんな人たちを日常、みかけたり、自分自身がそんな行動をしてしまっています。

- ・公共の場所にゴミを投げ捨てる。タバコの吸殻を街角にすてる、車の中から放り投げる。
- ・人の悪口を言う。
- ・人の噂話をする。
- ・初対面の人に失礼な発言をする。
- ・横柄な態度で人に接する。
- ・倫理上正しくないことが行われているのに、それをとめない。
- ・人が困っていても助けない。見て見ぬふりをする。
- ・ひとりだと静かだけれど、大人数になると場所をわきまえずに大声で会話する。
- ・授業参観の最中に、教室の後ろで他の親とおしゃべりに夢中になってしまう。
- ・直接話をするよりも、携帯電話での会話時間のほうが長い。
- ・インターネットのパソコンで中傷合戦がおきる。

- ・他の子を、他の人をみんなでいじめる。
- ・気に入らない人、自分たちのグループにはそぐわないと思った人を仲間はずれにする
- ・人の足を引っ張ってでも自分が上に行こうとする

豊かな社会性を子どもの中に育むのは、今の社会では、学校であっても、ホームスクールであっても、とても大変なことなのです。

社会性と団体性は違う

社会性は何かと聞かれたとき、わたしの頭に最初に浮かんだのは、団体行動ができるかどうかでした。上からの指示に従って、列からはみださないように、きちんと行動できることといったことです。

でも、これは、社会性ではなくて、団体行動に従えるかどうかです。

団体行動の必要性は、海外などのツアーパックのとき以外は、一般社会ではあまり見かけることはありません。どちらかという、軍隊で大変に重んじられる行動形式です。

なぜ、社会性＝団体性にとらわれてしまいがちなのかというと、日本は、学校で、朝礼や入学式、卒業式、運動会をはじめとした各種イベントのさいに、整列、起立、グループ編成形成など、世界の中で軍隊式の教育が日常、行われている珍しい国です。このため、つい団体一律行動を思い浮かべてしまうのかもしれない。

社会性って何？

社会性とは、その社会の中で、人との意思疎通をはかりながら、ルールを守り、互いに助け合っていくことです。社会のなかでのバランス感覚と説明する人もいます。

社会性とは、家庭で親が子どもに教えるべき基本的なことです。子どもが1日の大部分の時間を学校ですごすようになってしまっただけからは、親が子どもと接する時間が少なくなってしまうことから、学校にこの大切なことを押し付けてしまったのではないのでしょうか。

海外との比較

海外では、子ども達はどこで社会性を身につけていくのでしょうか。

カナダやアメリカでは、学校は基本的に勉強をするところであり、しつけや社会性を育む事は親の責任といえます。子ども達は学校が終わったあと、地域の中のスポーツクラブへ通ったり、教会のボランティア活動、そのほかの活動に関わっています。

ボーイスカウト、ガールスカウトは、ほとんどの子ども達が参加経験があり、年齢を超え、キャンプやゲーム大会、寄付金集めのためのチョコレート販売など、活発交流しています。会の運営は、親のボランティアによって行われています。

スポーツクラブは、日本では会社運営ですが、カナダやアメリカでは、親達がボランティアでクラブを運営し、コーチを雇い、遠征試合があれば、親が大型バスや宿泊所の手配をし、マネージャーとして何人もが参加していきます。

台湾では、親族の絆が強く、親族がひとつの大きなマンションやアパートに集中して住んでいたり、市内に集まって住んでいて、子ども達は親戚の大人や子どもの間で育ちま

す。

年配者を敬う習慣は、最近はやや薄れてきたものの、やはり根強く残っていて、子どもたちは、親や周りの人が年配者を大切にしているのを見て育ちます。

子ども達は、大人からとても大切にされ、かわいがられています。そうやって育った子ども達は、自分達よりも小さな子ども達と、とても仲良く遊んだり、面倒を見たりします。

日本のホームスクールと社会性

日本では、戦前までは、人々は、生活が今ほど豊かではありませんでしたが、家族同士、親戚同士、そして地域の人たちは、助け合って生きてきたという印象がわたしにはあります。戦後、大きな都市に人々が押し寄せるように移り住むようになり、お互いに干渉しあわないように心がけるようになってしまってから、日本の伝統的な良い面の社会性を育てる場が消えつつあるように感じます。

社会性の基本はまず親が教えますが、それからは、周りの大人が子ども達に教えるべき事だと思えます。

ホームスクールであれば、たくさんの自由な時間があり、赤ちゃんや遊んだり、おじいちゃんやおばあちゃんの家へ遊びに行ったり、わからないことがあれば、周りの大人に教えてもらう機会がたくさんあります。

母親が子どもを連れてボランティアやサークルの活動に参加すれば、子ども達は、親がどうやって他の大人と接しているかを、見て学ぶ事ができます。

日本が戦後に失ってしまったものを、ホームスクールは取り返すことができる、そんな風にも考える事ができます。

ホームスクールをこれからはなりたい皆さん、子どもの社会性について気になるのは、それだけ子どもの将来のことを真剣に考えているということです。はじめての挑戦で不安があるかもしれませんが、ご自身と、社会の器の大きさを信じて、今出来る事をぜひ実行なさってみてくださいね。

【7】 4 歳 ~ 7 歳 ~ 1 4 歳 ~

子どもの成長は3段階

子どもの育ちや学び、家族の間でのきずなの育みは、ホームスクーラーであっても、学校に通っていても、同じ過程をたどると想像されます。

ホームスクール側の視点にたつて、4歳から13歳ぐらいまでの子どもらしさが輝いている年齢、14歳から16歳ぐらいまでの、心とからだに大きな変化が起きる年齢、16歳から18歳ぐらいまでの社会への準備期間にあたる年齢と3つのステップに大きく分けました。

学校システムと異なった分け方なのは、子どもの心とからだの成長の変化に焦点をおいているためです。男の子と女の子、それぞれの成長の仕方によって、さらにいろいろなバリエーションがあります。

4歳ぐらいから13歳ぐらいまで・・・

【ホームスクールの主人公は？】

子どもにとっては、創造力を蓄積していく時期。

主役は、子どもなのだけれど、親がホームスクールとは何かがよくわかっていないため、主導権は試行錯誤している親にある。生活のリズムは、ホームスクールをはじめてから2年から3年してやっと落ち着いてくる。

親は、子どもの才能や、やりたいことに気がつかなかったり、気がついていても、何をしてやったら良いのか具体的に思いつくことができず、迷うことが多い。特に晩生の子どもは、まだ才能を表し始めていないので、親は焦ってしまうことも。

この時期は、「我が家流のホームスクール」がどんなことかまだわからないため、親は、子どもをあちこち連れて回ったり、学習教材を試したりと忙しい。子どもは、そんな親につきあうことになり、楽しかったり、しんどかったりする。

後になれば、濃厚なこの時間は、生涯の大切な思い出になる。子ども達との会話や作品、写真は、とっておくと、後に家族にとっての大切な財産になる。

【友達作り】

親は、自分が学校へ通っていた経験から同年代の子供同志の付き合いが重要だと考え、子どもの友達作りを心配する。このため、子どもの友達作りを目標に、外へ出歩く機会が増えることもある。でも、親子関係の土台ができてくると、周りが気にならなくなり、友達が少なくても心配せずにすむようになってくる。

小学校の高学年になってくると、子ども自身が友達を欲しがるようにもなってくることもある。そのときは、塾や習い事、スポーツクラブ、フリースクールが交流の場所になることが多い。

フリースクールに子どもを入れることを望む親は多いが、ホームスクーラー向けのフリースクールの数は大変に少なく、しばらく通った後、最終的にわが道を選ぶ家族が多いと予想される。

子どもの様子によっては、友達作りの環境を作るため、親がひとがんばりする必要もある。

それは、子どもに直接、働きかけるのではなく、親自身が変わる、自分のためのネットワークを作ることがポイントになる。逆に無理に子どもを動かそうとすると、子どもから反発されたり、子どもが大きく引いてしまったりすることもある。

【学び】

大人になったときに社会で生きていくのに必要な、「知りたいことを知るための技術」を学ぶ初期の段階。

たくさん本を読む、絵を描く、物をつくる、遊ぶといった感性を育むための時間が確保されていること重要で、親が、「感性とは何か？」「学びとは何か？」を子どもから学ぶ時期でもある。

【家庭哲学】

家庭の中には、「家庭哲学」が必要だということに、ホームスクールを始めた親たちは気づき始める。それは、家族同士がお互いに、助け合う、信頼しあう、好きになる、尊敬する、認める、受け入れる、勇気を出すということに始まり、やがては、社会の中で生きていくための基盤となるもの。

親は、学校や世間、これまでの自分の人生の仲で経験してきたことや、自分が子どもの頃の家庭のあり方などをふりかえり、それをどうホームスクールと関係させるのかを考え始める。

【周りとの関係】

家族の中に反対者を抱えてしまうのが一般的で、夫や祖父母だけでなく、親戚から強い圧力がかかる家族もある。ホームスクールの情報がほとんどない家族に、ホームスクールの経験がない母親が、どう情報を伝えるか、どう子どもの気持ちをどう代弁できるかがネックになる。

近所や学校との接し方にも気を使うことが多く、ストレスも高い。「世間体」をどう乗り越えるかは、親の最大の課題の一つ。

14歳ぐらいから16歳ぐらいまで

【ホームスクールの主人公は？】

子どもの個性が、具体的にはっきりしてくる時期。親が用意したことに対し、関心を示さなくなったり、自分のやりたいこととは違うと、主張し始める。

それまで親も主人公のひとりだったホームスクールは、子ども中心になってくる。今まで好きなことがあった子どもは、それをさらに深めたり、まったく違うものに興味を持ち始める。

それまで、趣味や好きなことが特になかった子どもが、ある日、何かをきっかけに夢中になり始めるものを見つけるのもこの時期。

からだの成長と心の成長のテンポが合わず、疲れが出やすくなる。睡眠時間が以前より多くなったり、風邪などの病気にかかりやすくなったりする。

子どもは、主張はするけれど、実力がまだ伴っていないので、親子の間でぶつかりあいも。日ごろからお互いの意見を聞きあっている家庭では、好ましい形での意見衝突が予想される。

【友達作り】

同年代の仲間を求め始める時期。親以外の人と、自分の興味のある話題について、おしゃべりをしたり、一緒に活動したいと思うようになる。

学校へ通う子ども達は、学校の子供達は、部活や塾通いで忙しくなるので、友達作りや今までの友達関係を保つことが難しくなる場合もあれば、忙しいからこそ、自分達で時間を調整して、友達関係を保とうと努力するようになる子どももいる。

子どもがひとりで外へ出歩けるようになるので、地域のスポーツクラブや合唱クラブ、演劇クラブ、英会話学校など、交流の場所がみつければ、そこで新しい友達作りがはじ

まる。親は同年齢の子どものグループを考えているかもしれないが、大人のグループであっても、そこを居心地が良いと感じる子どももいる。

子どもの友達作りの場を捜すため、親の協力は必要とされるが、押し付けや心配のし過ぎは、子どもの反発を招く。

【学び】

14歳の誕生日を過ぎると、思考能力が理論化してきて、算数、数学、英語の文法を始めるのが楽になる。それまでぜんぜんやってこなくても、根気とやる気、十分な時間があれば、小学校6年間、中学校の1、2年生の算数、数学、英語は、14歳、15歳の2年間で習得は可能と言われている。特に英語は、主語、述語、名詞、形容詞、副詞といった文法上の役割がわかり始めてくるので、達成感が出てくる。

音楽や機械、スポーツ、料理などが好きな子どもは、技術的な面に関心を持つようになり、手先やからだの機能の発達から、さらに高度で細かい作業ができるようになってくる。

学習が好きな子どもを持ち、自分が進学コースを経験している親は、この時期、満足度が高いかもしれない。一方、進学コースを体験した親が、芸術やスポーツ、労働に関心のある子どもをもった場合、とまどいがあったり、サポートの仕方に迷いが出てくる。

子どもの夢と、親の期待にギャップが出始めるのもこの時期。特に、親が体験したことがなかったり、失敗していたり、自分がかねえることができなかった夢を子どもに期待している場合、自分の可能性に挑戦したい子どもとの間で、コミュニケーションがぎくしゃくする可能性もでてくる。

【外部からのサポートの必要性】

学習面、活動面など、親以外の第三者のサポートが重要なカギになってくる。これは、この頃になると、親以外の大人の意見や考え方をどんどん吸収し始めるようになるため。また、学習の動機付け、将来やりたいことへのきっかけとなるような何かを与えてくれる人との出会いは、子どもの視野を大きく押し広げ、子ども自身もそのことを望みはじめている。

その意味ではいろいろな人と出会える場所や機会をもつことは大切。

ホームスクールを始めて5年以上たてば、親はホームスクールの良さをはっきり確信できるようになる。

16歳ぐらいから18歳ぐらいまで

【ホームスクールの主人公は？】

子どもは、やりたいことがだんだんはっきりしてくる。ホームスクールは、子どもが完全に主役になる。

親は、サポーター役に回るとともに、子育てが終わった後の自分の人生を考え始める。ホームスクールに捧げた時間や労力は、加算してみると相当なもので、子どもが離れていったあとどう生きるかが課題になってくる。

【学び】

子どもは、一度、目標を持ち始めると、それに向かって前進することが多い。専門学校や大学への進学、アルバイト、就職、資格の取得など、外の社会に関心を持ち始め、またそれに向けて行動開始ができる年齢でもある。

体力が出てくるので、長時間、同じ作業（学習や創作活動、スポーツ）に取り組んだり、スポーツと学習、または仕事との両立がしやすくなる。

自分でスケジュールを立て、それにそって学習や活動を進めようとしたりする。自分のやりたいことをするために、健康管理（睡眠時間の調整や運動、食事）が大切なことにも気がつき始める。

インターネットの利用が上手になる時期で、学習面や趣味のことで、専門家に意見やアドバイスを求めることが出来るようになり、学んでいること、やっていることの質が急に高まってくる。

興味のある仕事をしたい、仕事をして収入を得て自分のやりたいことに投資をしたいと思う子ども出てくる。アルバイトや、就職、インターネットを通じて仕事をしたり、自分でビジネスを起こすことも可能になってくる。

【友達作り】

子どもは、交通機関を利用して、どんどん外へ出られるようになり、一人旅や、アルバイトをし始める。習い事のクラブやボランティア活動で、リーダー役を引き受けることも。子どもが飛び込むのは、同年齢のグループではなく、異年齢の社会集団なので、適応しやすいといえる。

親は、小さな頃から通っていた習い事や処々の活動場所は、子どもが社会へ出て行くまでの準備の場であったことをあらためて認識したり、かかわってくれた人たちに感謝する時期かもしれない。

【周りとの関係】

義務教育の期間が終了することから、子どもが学校へ行かないことに対して、学校側から圧力がかかることがなくなる。

学校に依存してきた場合、頼ったり、非難する対象がなくなるので、親子共に不安になることもあり得る。

ホームスクールを始めた時点で、子どもの教育や人育てにおける最終的な責任や義務は、親にあることを自覚するのは、とても大変なことだが、いつか必ず義務教育修了の日はやってくるから、早目からの心の準備は大切だし、そのほうが後々に楽になれる。

【子どもの自立】

ホームスクールを卒業して、学校へ通い始める子どももいるし、学校へ通った後、ホームスクールが良いからと戻ってくる子どももいる。

いろいろな理由で、家を出る子どもたちもいる。たとえば、自分の力を試してみたい、親子の依存関係が強すぎることから親から離れてみたいなど。家を出たあとは、学校へ通ったり、フリーターをしたり、ボランティアをしたり、旅に出たりする。親は、離れたところから経済面や心理面をサポートしなければならないことから同居に比べ、とても大変になるが、子どもにとっては大きなステップになる。

子どもが何年も外に出られない場合、信頼できる第三者探しは必須。親は、子どもの将来の自立を考え、あきらめないこと、腹をくくることが重要。親だけでは抱えきれないことなので、親同士の相互支援も必要になってくる。

17歳、18歳から後・・・

ホームスクールを卒業した子どもたちは、普通に進学し、就職し、結婚している。

人生においてとても大切なこと、たとえば、「今、幸せですか？」「充実した人生を今送っていますか？」と聞かれたとき、「はい」と答える人は、学校出身者よりホームスクール出身者のほうが圧倒的に多いという研究データがある。

何年もホームスクールをしてきた親たちが、このデータに大きくなずくことは間違いないだろう。

Part2

【1】石の上にも三年

ホームスクールを始めてから、いったいどのぐらいたつと、生活にリズムができ、安定してくるのでしょうか？

最初の1年間は、「やりたいこと」と「できること」のふたつの間を行ったり来たりします。

朝、何時に起きるのか、そのあと何をするのか、お昼はどうするのか、午後、何をするのか？

毎日が夏休み状態になるので、時間配分や、時間の使い方に試行錯誤を繰り返します。

多くの子ども達は、暇なたくさん時間をもてあまし、親はそのことを気に悩みます。

多くの子ども達は、毎日がエキサイティングで、明日、何をするのかと思うと、嬉しくて胸がドキドキします。

そして、ほとんどの子ども達が、1年たつと、自分のやりたい事、好きな事にたくさんの時間を使えるホームスクールの良さをたっぴりと味わうようになります。

そして、3年たったある日、親は、ホームスクールが軌道に乗っていることにふと気がつきます。

3年は、長そうですが、その試行錯誤の時間は、子ども達の生きる力の基礎作りの期間であり、親にとっては、自分の価値観を確かめたり、視野を広げる時期で、無我夢中になっている間に、過ぎていくでしょう。

ホームスクールの旬の始まりです。

【2】燃え尽き症候群

ホームスクールをしていて、

「ストレスが大きくなった」

「楽しむどころか、しんどいことばかり」

「疲れる」

「子どもが、楽しんでいないのがわかる」

「どうにもうまくいかない」

そんな気持ちになったら、ホームスクール燃え尽き症候群になっているのかもしれない。

【燃え尽き症候群のタイプ】

ホームスクールをしていて、一生懸命やっているのに、うまくいかなかったり、疲れ切ってしまうとき、大きく分けて、みっつにタイプが分かります。ひとつは、始めたばかりで張り切りすぎてしまった時、次に、子どもの希望に親がなかなかそえない時、そして、仲間をサポートしている時によく起きます。

スタート地点でがんばり過ぎた場合

はじめてのホームスクールで、どこから手をつけていいのかわからず、だからといって、何もしないのも不安、仲間が欲しいといった理由から、自分でも気がつかないうちに力が入りすぎてしまうことがあります。たとえば、

「外に出る機会をたくさんもったほうが良いと思ってみたのだけれど・・・」

- ・子どもに社会性を身につけさせたいと、あちこちのグループに連れて行っているのだけれど、それだけで一日が終わってしまう。
- ・ホームスクールの仲間を求めて、ホームスクールをしている家族を訪ねていたり、フリースクールや、学校主催の不登校の会に出かけていくことで、仲間がいることがわかったのだけれど、その場所へ行くまでが遠かったり時間がかかりすぎたりする。
- ・科学館や美術館にできるだけ出かけるようにしているが、場所が遠すぎる。

「学習に意欲的に取り組んでみたが・・・」

- ・とりあえずドリル学習からさせようと取り組んでみるが、はじめてのことで、母親のストレスは大きく、一方、子どもも強要されていると感じてしまい、なかなかうまくいかない。
- ・手作り教材作りに挑戦するが、「作り続ける」ことに苦勞する。

「夫や周りの人にホームスクールのことを受け入れてもらいたいと思っているのだけれど・・・」

- ・夫や同居の家族からの同意なしでのスタートだったため、始終、いろいろなことを言われる。
- ・夫の協力が必要なことが多いのに、夫の仕事が忙しすぎたり、同意を得られないため手伝わってもらえない。
- ・ホームスクールのことを家族以外の回りに理解してもらいたくて、誠意を尽くして説明しようと思っているのだけれど、反対されたり、家に子どもを来させなくさせる家族がいて、精神的に辛くなってしまう。

アドバイス：

1日は24時間で、母親のからだはひとつしかないこと、最初にダッシュしてしまうこと一気に体力と精神力を消費してしまうことから、ホームスクールを始めたばかりのときや、ときには数年間は、のんびり過ごすことを意識してみると良いかもしれません。

子どもの希望に親がなかなか添えない場合

子どもたちの中には、親の知識を上回ることを知りたい、習いたいと思っている場合があります。自らそのことを見つけ出せる年齢になっていたり、その方法を知っていれば、子どもは自分で能力を伸ばしていきます。

まだその年齢に達していなかったり、指導してくれる適任者がみつからない場合、親は、時期が来るのを忍耐強く待つか、適任者を探しをする決意をする必要があるかもしれません。

アドバイス：

待つことはとても大変なのですが、必要な時期がくれば、必ず必要な人との出会いが訪れます。これは、多くのホームスクーラーが体験していることです。きっと会える、そう信じる、あきらめない、でも強く期待をしすぎない、そうしているうちに、忘れた頃に（＝本当に必要になったとき）チャンスがめぐってきます。

【仲間をサポートしたいのだけれど、それが大変なとき】

何ヶ月、何年かがたつと、ホームスクールの新しい仲間に出会うようになります。経験者としてアドバイスを求められたとき、十分に経験をつんできたり情報をもっていれば、何か助言をしたり、一緒に活動ができるのですが、まだ自分が暗中模索の最中であるときには、強い確信がもてず、迷うことが多いかもしれません。

相談の内容によっては、受けるには重過ぎることもあります。このようなときには、必要に応じて、専門の相談者を知っているのであれば紹介したほうが、お互いにとって良い結果となりえます。

アドバイス：

子どもがホームスクールを卒業し、ホームスクール全般を第三者としてホームスクールを振り返ることができるようになったときに、いちばんアドバイスしやすい立場なのかもしれません。

ホームスクール経験者が少ない現在、お互いに助け合い、知恵を出し合い、ときには、お互いに失敗しあいながらも、共通の経験を重ねていく、それが、今、どの家族にも起きていることであり、それがその家族なりの財産となっていきます。

燃え尽き症候群は、誰にでも起きる可能性はあります。燃え尽きた後には、新しい視点を持って取り組める機会が次に必ずひかえています。そして、そのことを信じる、それが大切です。

【燃え尽き症候群から立ち直れないとき】

ホームスクールの節目

長期間にわたり、燃え続けてきた場合、エネルギーが尽きてしまうと、充電しなおすのにより多くの時間を必要とします。

そのときは、ホームスクールが大きな節目を迎えている可能性があります。たとえば、

- ・子どもが、学校に行く時期がきている。
- ・子どもが、学校へ行く機会が準備されている。
- ・子どもが、家を離れる時期がきている。
- ・子どもが、就職をする時期がきている。
- ・子どもが、今までとは違ったホームスクールのやり方を必要としている時期がきている。
- ・家族関係に変化があったり、生活自体に大きな変化がある。
- ・親の考え方に大きな変化が起きている。
- ・子どもの心に大きな変化が起きている。
- ・社会の教育に対する価値観や受け止め方に変化が起きている。
- ・親の体調がすぐれない。親自身に悩みがある。更年期障がいに入っている。
- ・その他

親の燃え尽き症候群の原因は、ひとつではなく、いくつかが重なり合って起きがちです。そのため、立ち直りや、新しい道の模索には時間や労力がかかります。

学校に通う子の母親だって燃え尽きる

子どもの教育は、ホームスクールであっても、学校であっても、フリースクールであっても、日本であっても、ホームスクール先進国のアメリカであっても、親にとっては、大きな課題のひとつです。

このため、ホームスクールの親だけでなく、学校へ子どもをやっている親も、フリースクールの親も、燃え尽きることはあります。

教育だけでなく、子育てそのものでも、無理をしてしまったり、理想と現実の板ばさみになってしまったり、欲が出てしまったりすることも、誰にでもよくあることです。

癒しは、仲間と時間

そんなときは、ホームスクールの仲間や、第三者に話を聞いてもらおうと、どこに無理が起きているのか、理想と現実とどちらを選んだ方が現状にあっているのか、どこで一歩ひいたほうがよいのかが見えてくるかもしれません。

もしも、燃え尽きてしまったら、再びエネルギーをたくわえるため、ゆっくり心とからだを休ませること、それが、遠回りのようで一番近道です。焦らない、子どもに無理強いしない、自分を責めないことが大切です。

アドバイス：

燃え尽き症候群になってしまったと思ったら、植物を育ててみましょう。花でも、ハーブでも、野菜でもなんでも良いのですが、種や野菜なら小さな苗から育てることが大切です。種か苗、土と、鉢植えを購入します。

植物を育てることは、命を育てることです。植物の成長は、弱った心にエネルギーを与えてくれます。

【3】体験者の感想

ホームスクールをしてきたご家族の感想です。

「わたしたちの毎日って、すごく充実しているって思わない？」

「ホームスクールは、考える時間がたくさんある。学校の子供達は、いつ考えるんだろう。お母さん、ホームスクールにしてくれて、ありがとう」

17歳 あすか カナダ

「毎日、ねる前に、あしたなにをしようってかんがえると、むねがドキドキするの」

6歳 女の子 岐阜

「あさ、すきなだけねられていいよ」

6歳 女の子 千葉

「重いかばんをもって学校へ行かなくてもいいのがいい」

6歳 男の子 フィリピン

「ホームスクールは自由な時間がたくさんあって、それがいい」

10歳 男の子 千葉

- * 皆様の声もぜひお寄せください! **

【4】きょうのランチ

お昼のメニュー

ホームスクールについての日常生活についての質問のトップは、

「お昼ご飯をどうするのか？」

「他の家では、何をお昼に出しているの？」

と、お昼のメニューに多くの母親が関心をもっています。

なぜ昼食に悩むかですが、一日三度の食事となると、メニューが思いつかなかったり、できるだけ栄養があり添加物の少ない健康的な食事を、親は作らなければならないのではないかと思ってしまうからでしょうか。

親は、ホームスクールと家事、ときには仕事を同時平行にしなければならなかったり、忙しすぎて、お昼のメニュー作りまで気が回らなかったり、負担に思えたりします。

大変なのは、子どもたちもで、
「きょうのお昼は、何を食いたい？」
の母親の毎度の質問に、
「あ～、まただ」
と、かなり困惑しているようです。

お昼に悩まないためのコツ

ホームスクール初心者で、食事作りやレシピにいつも悩んでいる場合、次のようなアドバイスが、経験者からあげられています。

- ・自然食品や健康食品にこだわる必要はない。
- ・インスタント食品や、コンビニ食でもかまわない。
- ・ワンパターンでも良い。

朝食や夕食で、野菜や肉、豆類などをたくさん食べていれば、昼食は、おにぎりだけでも大丈夫です。おにぎりだけでは足りなかったり満足できなくなるような年齢には、子どもは自分で簡単なお昼を作れるぐらいに成長しているでしょう。

火を使わない簡単レシピを子どもに教えておく

子どもに、火を使わなくても作れる料理を教えておくと、親は助かります。

- ・サンドイッチ・・・ハム、チーズ、サラダ菜、トマト、
ポテトサラダやツナのマヨネーズ和え、サワークリームチーズ和えなど、

サンドイッチにはさむ具を前の晩のおかずにも多めに作っておく。
包丁がまだ使えないなら、朝食のときにトマトをスライスしておく。

・おにぎりとインスタント味噌汁 味噌汁に乾燥わかめをどっさり入れる。おしんこや、きゅうりの塩もみを添える。

子どもでも作れる火を使った簡単料理

・ラーメン、冷やしラーメン、うどん、そうめん、チャンポン、焼きそば、かた焼きそば

具たくさんにする。乾燥ワカメ、冷凍コーン、のり、焼き豚など。

・カレーライス、ハヤシライス
・チャーハン
・スパゲティ、マカロニ 缶詰やインスタントルーも活用。
・冷凍ピザ トッピングを自分で増やす。
・ぎょうざ、しゅうまい 一度にまとめて作って冷凍しておく。焼くのがむずかしければ、

水餃子にする。

・具たくさん味噌汁、スープ

変化する食事の内容

昼食のメニューは、年月と共に変化していく場合がほとんどなようです。

たとえば、始めは、自然食にこだわっていたけれど、頑張りすぎて力尽き、インスタントやお惣菜を積極的に活用するようになったり、逆に、最初は、冷凍食品や菓子パン、コンビニ食が多かったのに、次第に、手作り料理が多くなったりします。

子どもと一緒に料理を作るのが好きな家族や、母親が忙しすぎてお昼時間がいつも遅くなってしまふ場合は、いつか、子どもが自分で作って親に食べさせてくれるようになるかもしれません。

料理が苦手だった母親が、何かを機会におかずやパン作りにこりだすこともあります。

アメリカの昼食

サンドイッチ 調理時間：約3分から10分

アメリカは、お昼は、毎度、サンドイッチで中身もワンパターンが多いようです。

サンドイッチのパンは、種類が多く、それがバラエティを添えています。食パンは、白いパンだけでなく、いろいろな種類の麦パン、ベーグル、ハンバーガー用のパン、マッフィンなどがあります。

具は、ハム、チーズ、ピクルスが主流で、サラダ菜やトマトを添えることも。バター、マヨネーズ、トマトケチャップ、マスタードをたっぷりつけます。

バターピーナッツやジャムだけだったりする家族はかなりあります。野菜が少ない分は、果物で補っています。果物は、生の果物のほか、缶詰が多数あります。

スープ： 調理時間：約3分

スープは、缶詰を利用します。豆やトマトをベースにして物が多いのですが、豆やトマトの種類自体も多く、全体の種類は日本の数十倍はあります。

インスタントのマカロニ&チーズ： 調理時間約5分

日本のインスタントラーメンに匹敵する子どもや若者の大好きな一品です。マカロニをゆで、ゆであがったら、チーズを粉状にしたものと牛乳をいれ、食べるときにケチャップを入れて食べます。

【5】ホームスクール論争

お寿司を食べたことのない人とお寿司論争

ときどき、ホームスクールに反論する人と話をすることがあります。

ホームスクールをしている人は、ほぼ全員が学校経験者で、ホームスクールと学校の両方の実態を良く知っています。

ホームスクールに反論を持っている人は、ほぼ全員が学校経験者で、ホームスクールの経験をもったことがない人です。

ホームスクールについての、この両者の論争は、寿司を食べたことのない人と、寿司を食べたことがある人が、寿司の美味さについて論争をするようもので、どこまで行っても平行線になってしまうという特徴があります。

ホームスクールとは家庭哲学のこと

ホームスクールは、家庭で、そして地域の中で子どもを教育することです。そして、何年かホームスクールをしていくと、子どもを教育する上で最も重要な家庭哲学という目には見えないもの探しであることに気が付きます。

家庭哲学は、哲学者でも文学者でもない、素人の親が言葉で語り尽くすには、あまりにも困難で、もしも論争になったとき、ホームスクールをはじめてまだ日が浅い親は、ホームスクールを語ることがいかに難しいかを実感します。

家庭哲学を語れるようになるには、何年もの月日が必要です。それは、自分の人生を哲学として語れるようになるためには、時間が必要なことと似ています。

親だけで子どもは育てられるのか？

ホームスクールをしていて親だけで子どもを育てられるのか？ という質問があります。

ホームスクールは、親が子どもの教育のすべてに責任を負いますが、親だけで子どもを教育するというものではありません。

子どもは、ホームスクールであっても学校であっても、親だけで、あるいは教師だけで教育をするのではなく、地域や、地域を越え、たくさんのさまざまな人の手によって育てられるのが、本来の自然なありかたです。

親や教師の知識や体験、価値観は、限られたものです。多様な子どもに育てるには、さまざまな年齢、職業の教育者が必要です。

親というたったひとつのカテゴリー、教師といったたったひとつの職種の人だけと日々を過ごすより、公民館や図書館の職員、八百屋のおじさん、ピアノ教室の先生、ボランティアのお兄さん、お姉さん、スイミング クラブのコーチ、合唱クラブの友達のお母さん・・・

そんなさまざまな人たちから、知恵や知識、独特の価値観を受けとり、どう接したらいいのかを学ぶことに大きな意義があります。

子どもたちが社会に与えるもの

社会の中で育つ子どもたちは、社会にプラスのエネルギーを与えます。

子どもたちと会話を交わした大人たちは、知恵や知識を次の世代へ伝えることができた満足感や幸福感をもつとともに、小さな子どもたちからもらった小さな感動に心をなごませます。

子どもは社会に育てられますが、一方、社会は子どもたちを通して満足感や幸福感を得て、前へ前へと進むことができます。

萎縮する社会と、ふところの大きな社会

子どもが安心して過ごすことができない社会は萎縮し、萎縮した社会は、子どもたちにストレスを与えます。ストレスをかかえた子どもたちは、社会に問題を引き起こし、社会は硬直化していきます。

親が、わが子だけを幸せに育てたいと思ったとき、社会は萎縮し、他の子どもも、幸せになってほしいと思ったとき、社会の懐はそのぶん広がります。

ホームスクールを支える視野の広い人たちとの出会い

親が、広い視野で育てたいと思ったとき、さまざまな価値観を持った人との出会いが起こります。

子どもは学校でしか教育を与えることができないと信じる人たちがいる一方、戦争を体験したり海外で暮らしたことがある人たちの中には、学校という場にとらわれなくても、親の考え次第で十分な教育が受けられると確信している人たちもいます。

いろいろな問題が学校で起きているのを知っていても、学校がいちばんと思っている人もいれば、問題があるのなら、その外へ出て子どもを育てたほうが大変だけど賢い選択だと思っている人もいます。

学校へ行くことが辛くても努力して通い続け、そのことが良かったと思っている人もいれば、不登校を選択し、それが良かったと、大人になった今、自分の決断をあらためてかみしめていたり、そのことを受け入れてくれた親に感謝している人もいます。

親のエゴとは

ホームスクールは、親のエゴで育てているのではないか？ 親の育て方や真情が間違っていたら、子どもをダメにしてしまうのではないか？という意見があります。

親のエゴには、いろいろあります。

才能があると信じている子どもに特別な教育を与えたり、自分が有名大学に入れなかったことからその夢を子どもに託す親は多いのですが、どの時点から、周りはそれをエゴと呼ぶ様になるのでしょうか？

仮に、親が周りをあきれさせるほど子どもの教育を自慢しても、子どもがハッピーな状態であれば、エゴではなく、親ばかりみなされるかもしれません。でも、子どもが、大きなプレッシャーを受け、暗い顔をしていれば、回りの同情は子どもに集まり、親への批判は高まるでしょう。

ホームスクールは、子どもがハッピーな状態でなければ、ホームスクールとはいえません。なぜなら、ホームスクールの主役は、子どもで、それもハッピーな役だからです。

子どもが満足できている状態かそうでないかは、親が一番よくわかっています。もしも、子どもに何か期待をかけていて、子どもが疲れていたり、泣いたり、無理をしている様子があれば、それは、ホームスクールではなく、本当に親のエゴになってしまいます。

同じように、親の育て方に間違いがあるようなら、子どもにそれが出ます。親が気がつかなかったらどうしようと思うかもしれませんが、早い時期にホームスクールに限界を感じるようになります。

もしも、進む方向がわからなくなってしまうたら、楽しくホームスクールをしている家族に会って、話をしたり、いっしょに遊ぶことで、次への進み方がみつかるでしょう。それは、ホームスクールを続けることもかもしれないし、フリースクールや学校へ行くことの再検討になるかもしれません。

反抗期の子どもに親はどう接するのか？

親になった多くの大人たちは、子どもとの将来にある大きな危惧を抱きます。

「反抗期を迎えた子どもと、ちゃんと向かい合っていけるだろうか？」

ティーンエイジの子どもをもった親たちのなかには、子どもが、店の商品を盗んだり、プチ家出をしたり、悪い仲間にひきつりこまれたり、性関係の犯罪に巻き込まれ、親としての責任を問われるケースがどんどん増えてきています。

インターネットや携帯電話の普及で、自分たちの子ども時代よりも、わが子が危険にかかわる可能性が高いことを親たちはよく知っています。

自分の経験から、ティーンエイジの子どもの扱いがどんなにデリケートで難しいかを、わたしたちはよく知っています。

もしも、不良化し、親に悪態とつくようになってしまったティーンの子どもの、自分はどうやって話しかけるのか？ もしかすると、こどもは、いじめにあうかもしれない、でも、親に心を開いて相談してくれないかもしれない。

どの親も何らかの不安をいただいているのではないのでしょうか？

反抗期がない民族がいる

アフリカのように大自然の中で暮らしている民族の中には、子どもの反抗期がない人々がいるそうです。

理由は・・・

子どもたちは、親の狩りをする姿を見て育つ。命がけで狩りをする親を見て育つ子どもたちは、親を尊敬しながら、生きていくための知恵と技術を学んでいく。その関係の中では、反抗期はない。もしもあったとしたら、それは、子どもが親のもとを離れ、自分で狩りにでかけていくときだ。

親子が命がけで同一行動をした経験をもつ家族には、子どもの反抗期はない？

キャンプや山登りを家族みんなで一緒に楽しむ家族の中には、子どもがティーンになったときでも、反抗期がなかった、あっても、話し合いの中で、子どもは親の話にきちんと耳を傾けていたという話をよく聞きます。この場合、ホームスクーラーあたり、学校へ通う子どもの家族であ会ったりします。

息子、娘がいるある家族は、親子4人で、よく山登りをしていました。ときには、真夜中に大雨に降られ、テントが濁流に流されそうになったり、山の中で道に迷い、右へ行くか左へ行くかで生死を分けるような決断に迫られたこともあったそうです。

生死を共にし、チームワークで苦難を乗り越えてきたその家族の母親は、「うちの子達には、反抗期はありませんでしたよ」と語ってくれました。

チームワークが家族を支える

親子で、いっしょに遊んだり、家事をしたり、旅行の計画を立てたり、地域の活動に参加し、そのなかで成功体験と失敗体験を繰り返しながら共有してきた家族は、チームワークを育てる時間と機会をもつことができます。

そのなかには、親しき仲にも礼儀ありといった古風ながらも大切な習慣や、協力、助け合い、励ましあい、慰めあい、ごめんなさいとあやまることなど貴重なことを学ぶ機会がたくさんあります。

共同活動は、その場での話し合いもあれば、みんなで集まって家族会議を開く必要があることもあります。大人世代と子ども世代という異年齢集団が集まっての話し合いは、親子双方にとって大きなメリットがあります。

親子であることから、甘えもあり、きょうだいがかかわれば、けんかも起きます。距離の加減の調整、自分への厳しさ、他人への思いやりを育てる機会です。

子どもにとっては、家族だからこそ、何度失敗しても、次に挑戦することができます。失敗の過程を親がずっと見届けてくれているとわかっているからこそできることです。そして、成功したときの喜びも、親子で共有できるという楽しみがあります。

人は成功体験よりも失敗体験から学ぶことが多いのですが、親の失敗を子どもがどう感じ、受け止めるかは、とても重要なことです。失敗の後、親はそれを自ら次の成功へと持っていくのか、親に代わって子どもが成功に結び付けていくのか。時間と空間の枠を大きく越え、家族みんなで築き上げていく家族史は、子どもが大きくなったときの目に見えない財産になります。

子どもは、こうして地道にコミュニケーションの基盤を身につけていきます。そして、家庭の中で身につけたコミュニケーション能力を、社会の中でひとつひとつ試しながら、試行錯誤を繰り返すことで、豊かな社会性を身につけていきます。

社会とは、学校を含んだあらゆる場を意味し、子どもの社会 = 学校になってしまっている現状自体が不自然だといえます。

～体験談～ マスコミの対応

ホームスクール実践者： 久保淑子

ホームスクールのことで、テレビ局や新聞記者から何度か取材を受けてきました。

日本社会の中で、実際にホームスクールでやっていくことが良い選択なのかということに関しては、誰もが最初はかなり懐疑的でした。

そんな取材者たちも、数ヶ月に渡る密着取材をしているうちに、なぜホームスクールでもうまくやっていけるのか？に興味を持ち始めます。

そして、最後のほうにはは、ホームスクールも、教育のある方のひとつ、として肯定的になってきます。

ところが、放映用に編集したそのフィルムを、ホームスクールをまったく知らない上層部に見せるたら、それは日本ではあってはならないこと、ということで、反ホームスクールの編集に強制的に変更させられてしまったということが、過去いくつかのテレビ局でありました。

今は、ホームスクールの良さに重点を置くものが増えてきていて、時代の流れを感じます。

Part 3

【1】子どもが不登校になったら

子どもが学校へ行きたがらなくなった理由

子どもが学校へ行きたくないと言い始める理由にはいろいろあります。

- ・学校でいじめられている。
- ・学校の先生に子どもの行動を理解してもらえず、誤解を受けている。
- ・学校の先生や体制、時間の流れに不自然さを感じている。
- ・自分のこころや、からだにとって、居心地が良くなかったり、危険や不安を感じる。
- ・家族の中に何か問題があり、それがストレスになっている。
- ・自分に自信がない、自分を好きになれない、何をやってもうまくいかないように思える。
- ・授業についていけず、それが苦痛になっている。
- ・授業の内容が子どもにあっていない。

原因がはっきりしないのに、頭やおなかが痛い、ひざが痛いと言ったり、口の周りにできものが出てきたり（ストレスが大きく胃の具合が悪くなっている）、今までよりも声がいちオクターブ高くなっていたり、話し方が不自然に早くなったり、遅くなったりするのは、かなり本人が辛い状況にあることを表しています。

勉強が急にできなくなったり、今までできていた計算問題が解けなくなったりも、ストレスの大きさを表しています。

子どもに何が起きているのか、理由を知るためにはどうしたらよいのでしょうか。

まず子どもの立場になってみる

もしも、自分が子どものときに学校に行きたくなくなってしまうたり、いじめられたいなら、誰にだったら話してもいいかを考えてみます。そのときに、どんな質問をされるのがいやなのか、どんな反応をされるのが怖いのか、話をしたあと、どう扱われるのがいやなのかを、自分の子ども時代に戻って考えてみると、子どもの気持ちを理解する助けになります。

子どもに聞いてみる

子どもは、親（特に父親）に怒られるかもしれない、いじめてくる子や周りの子どもたちに「ちくっている」と言われるかもしれない、先生に知られたら怒られるかもしれないと心配しているかもしれません。

子どもの性格や、ふだんからの接し方によっても、打ち明けてくれる場合と、そうでない場合があります。

子どもは、今の辛い状況にさらされるようにして直面しています。

まだ小さくて、何が自分に起きているのかもわからないかもしれません。またどんな言葉でどう自分の気持ちを語っていいのかも、わからない状況でしょう。

親に見せたことのない自分、たとえば、いじめられている、先生に怒られている、うまく友達関係ができない、勉強ができない、を、親の目にさらすのは、小さな子どもで

あっても、大きな抵抗感があることがあります。

「いじめられていることは、親には言えない、親だから言えない」
これは、多くの子どもたちの気持ちです。

もしも、子どもの気持ちを聞き出すことができない場合は、無理をせず、子どもの気持ちを聞き出せないことを恥じたり、親としてのプライドが傷つくというような気持ちは捨て、第三者の助けを借りることは、とても大切です。

担任の先生に相談してみる

子どもがいじめに巻き込まれている場合、先生の目の届かないところでいじめは起きるので、先生は気がついていない可能性が高いといえます。

先生が問題に万が一気がついていても、子どもや家族のプライバシーにかかわるようなことだと、立場上、話しづらかったり、先生自体が混乱していて、対応の仕方がわからないこともあります。

学校の授業を参観する

学校で何か起きていていると感じたら、学校側に相談をして、授業を参観させてもらいます。子どもの様子や、他の子達との接し方を見て、もしも様子がおかしいと感じたら、先生に詳しく話を聞いたり、保健室の先生に相談をしてみます。

塾や習い事の先生やコーチに相談してみる

個人でやっている塾の先生や、ベテランの習い事の先生は、親や学校の先生が気がついていないことに、何か心当たりがあるかもしれません。もしも何かあっても、親のほうから相談がない限り、塾や習い事の教室のほうから連絡をとることははばかれるため、親が気がつくのを待てることもあります。

もしも、子どもとのあいだに信頼関係がある先生ならば、先生のほうからさりげなく聞いてもらうようお願いをしてみるのもひとつの手段です。

保育所や幼稚園の先生に相談してみる

もしも、保育所や幼稚園に通っていたことがあれば、担任の先生に当時の様子を聞いてみると何かわかるかもしれません。

専門家に相談する

学校の先生からかなりきついことを言われたけれど、事情がのみこめなかったり、納得できない場合や、塾や習い事の先生は、本当は事情を知っているようなのだけれど、詳しく話をしてくれない場合は、何か特別な事情があることが予想されます。その場合は、専門家にできるだけ早く相談することを強く勧めます。

【2】カウンセリング

ふたつのカウンセリング

家族が、相談機関を訪ねたとき、子どもと、親、両方がカウンセリングを受けることが

大切です。子どもに問題が起きているのに、なぜ親もカウンセリングを受けるのか、これは意外と思えるかもしれません。

ですが、子どもに問題が起きているとき、実は、親や他の同居の家族との間に問題があり、その問題に子どもが反応して不登校になっているケースがかなりあると報告されています。

また、子どもを変えるのではなく、親自身が変わることが、最も有効で近道になることも、たくさん報告されています。このこともあり、肯定的な気持ちでカウンセリングを受けることは、大きな価値があります。

子どもが受けるカウンセリング

カウンセリングでは、子どもの症状を診断するテストがあります。いくつか種類があり、あらかじめ質問が用意されていて、それに答えるやり方、描いた絵から診断する方法、おままごとのようなことをして行動や作った作品から診断する方法などです。観察者が複数いたり、専門家が複数かかわることもあります。

どんな場合であっても、子どものプライバシーと人権は厳守されなければならず、全ての検査は親の承諾をとったうえで行われます。

親が受けるカウンセリング

子どもが不登校になったり、ホームスクールを始めたけれど、親に不安感が大変に強く、とても毎日を楽しめないという場合、親自身に悩みがあったり、精神的に不安定なことがあります。自分の問題が解決できていないところへ、新たに子どもについての悩みを抱えることになり、とても辛い状況です。

夫婦の間で不登校やホームスクールをめぐる意見が衝突したり、理解してもらえず、行き詰まってしまうこともあります。

表面的には、不登校やホームスクールを始めたことが夫婦の間に問題を引き起こしているように見えますが、実際は、長年の間に、夫婦の間で意見の相違や感情のすれ違いが積み重なり、不登校やホームスクールという大きな変化が引き金となり、気持ちのすれ違いが表面化してしまったとも考えられます。

子どもの不登校は、夫婦と同居する義父や義母との間にある見えない力関係が、大きく影響していることもあります。

いずれにせよ、とてもプライベートな問題なため、他人には相談しづらく、そのため、問題への対処のスタートが切れなかったりします。

解決の糸口がつかめないまま、時間だけが過ぎることは、子どもにとっても、親にとっても、同居している祖父母にとっても、かなり辛いことです。

自分の気持ちをきちんと整理したり、冷静に人に語ることは、特に問題を抱えている場合、かなり困難なため、自分の気持ちを整理をしてくれる第三者の存在が必要です。第三者とは、一方的なアドバイスをしたり、ただひたすら話を聞くのではなく、絡んでしまった糸をほぐして、整理整頓をしてくれる係りのことです。カウンセラーや、ファシリテーターと言われる人たちが、その仕事をしています。

経験と訓練を十分に積み、なおかつ相性が合うカウンセラーを見つけるのは、とても大

変なことです、一生が左右される可能性もあり、時間がかかっても探し出すことが重要です。

【3】親が出来る事

他の人も同じことで悩んでいる

親はどんなことで悩んでいるのでしょうか？

人は、自分だけがかかえている特別な悩みと思っていますが、実は、多くの人が、同じような悩みを抱えています。とてもプライベートな悩みなので、人には簡単に打ち明けられないため、「自分だけ」が悩んでいると思ってしまうがちですが、そうではなく、他の人も同じような問題で、見えないところで同じように苦しんでいます。親の悩みは、例えばこのようなことがあげられます。

- ・ 子ども時代、親に大切にしてもらえなかった。
- ・ 子ども時代、他のきょうだいと比べて、自分だけ冷たい扱いを受けていた。
- ・ 子ども時代、親や親戚、他人から虐待を受けていた。
- ・ 子ども時代、両親の関係が悪くなかった。
- ・ 子ども時代、親にほめられたり、励まされた経験があまりない。
- ・ 子ども時代、自分の親が、本当の親に思えないことがよくあった。
- ・ わが子が赤ちゃんの時に働いていたため、十分に面倒を見てやれなかったという負い目がある。
- ・ わが子が赤ちゃんの時に経験不足で、うまく育ててあげられなかったような気がして辛い。
- ・ 自分の気持ちや感情をうまくコントロールできない時や日、期間がある。
- ・ 自分に自信がない。
- ・ 世間体を気にする親に育てられてきたからか、とても周りの目が気になる。
- ・ 配偶者の親や親戚との関係に苦労している。
- ・ 配偶者との間に気持ちのすれ違いがある。
- ・ 近所の人とうまくいっていない。
- ・ 人との関係作りが苦手
- ・ その他

相談相手として、信頼できる経験豊かな友達や知り合いがいればよいのですが、そのような人を身近にもつことは、なかなか難しいことです。また、プライベートな悩みを打ち明けることで、お互いの良い関係が壊れてしまうこともあります。

プライバシーという秘密を厳守し、山登りに熟練したガイドのように、十分な知識とトレーニング、経験を積んだ専門家は、中途半端な感情移入をすることなく、冷静に問題の整理整頓をするのが仕事です。子どもが関係していることもあり、デリケートなことから、相談相手は十分に考慮して選ぶ必要があります。

親自身が変わる --- やっかいな世間体をどうするか？

子どもが不登校になったとたん、世間体が気になり始める

子どもが学校へ行かなくなったとき、ほとんどの親が直面するのは、「世間体」や「他の子どもや家庭との比較」です。世間体や他人との比較は、親が小さな頃から身につけてきた日本独特の習慣のため、それをふりはらうのは容易なことではありません。

敏感な子どもは、親が自分のことを心配していることは、とてもよくわかっています。そして、それと同時に、親が世間のことをとても気にしていることにも気づいています。自分と、よその人とどちらが大切なのか？

子どもは、自分のことだけでも傷ついているのに、親の態度にさらに傷ついてしまいます。そして、そのことを実は、親もよくわかっていて、わかっているのに、世間体を振り払うことができない自分に悩み、それでも世間体を最優先してしまいがちです。

世間体は日本独特の文化

日本で、のびのびとホームスクールをしている家族は、世間体をあまり感じずに、毎日を過ごしています。もちろん、まったく他人の目を気にしていないわけではないのですが、「世間が何を言おうと、最終的な責任は親が負うことになっている」という結論を、やはり悩んだ結果、どこかの時点で見出しています。

海外では、アメリカ、カナダをはじめ、先進国では日本とドイツ以外は、ホームスクールが正当な教育として認められています。アジアの中からもホームスクールを認める国がどんどん出てきています。

海外のホームスクーラーは、世間体という文化がないので、他人の目を気にするということはありません。周りからは、自分たちがやりたいことを、自分たちの信念でやっているユニークな家族という評価になります。

世間体は、時代によってどんどん変わる

世界的にホームスクールが認められているという現状を考えれば、日本でホームスクールをする際に、どこまで世間体を気にする必要があるのかということになります。

世間体は、世の移り変わりにつれ、どんどん変わっていきます。

ほんの数十年前、世界の先進国で女性の大学進学が当たり前であった時代、日本では、大学に行きたいと言い出した娘に対し、親は、「世間様が許さない」と、娘の夢や希望に腹を立てたり、その話が世間に漏れないように娘に圧力をかけていました。

ですが今は、日本女性の大学進学率は、短大を含めば男性を上回り、世界の中ではトップに立っています。

同様に、ひと昔前までは、有名私立、国立大学へ入ることは、大企業への就職、成功への道として、大変に世間体も良かったのですが、年功序列が崩れ、実力が優先されるようになってきた今、世間体が、有名大学への進学を手放しで高く評価することはなくなってきました。

結婚も、成人したら一刻も早く身を固めることが常識だったはずが、今は、独身のまま30代、40代を迎えている男性、女性が周りにたくさんいます。

世間体は、こんな激しい時代の移り変わりに、ついていけなくなっています。

日本の教育については、みんながなんとなく不安を抱えています。ひと昔と比べ、学校だけが子どもの行き場所と考えていない人も増えています。不登校の人数は、毎年10万人以上にものぼり、ひきこもりの成人も増えています。親戚や知り合い、近所の家族、友達の中に何人不登校やひきこもりの子がいるか指折り数えてみると、その多さに驚いてしまうのではないのでしょうか。

多くの母親達は学校に不安をもっている

ホームスクールのことで、学校のことを話し始めると、同年齢の子どもを持つ親の多くは、実は、学校に不安を抱いていることに気がつきます。

幼い頃、目を輝かしていたわが子が、その光を日ごとに失っていくのを見て悲しく思っている親は、ホームスクールをしている人の話を聞くと、本当は自分も、学校から子どもを取り戻してやらなければいけないのに、それができない自分は、自信がない親で、それを実現しているホームスクーラーをうらやましいと思う反面、世間体を気にしないその勇気をこわいとも感じています。

実体のないものに惑わされない勇気

世間を作り上げているのは、人です。ひとりひとりの話をじっくり聞けば、すべての人が、学校を強く肯定しているわけでもなく、また、ホームスクールのことをよく理解できれば、全員が、頭から否定することはありません。

世間体は、見えないだけに、本人の勝手なイメージで誇大妄想になったりもします。でも、反対に気にしないようにすれば、またそれも可能です。そして、惑わされないようにと自分に言い聞かせる勇気も大切です。

社会の価値観が、時代の変化と共にいろいろな方向に散り始めていることから、世間体も同じように自分たちが考えているよりも、本当は、もっと弱いものになってきているのかもしれない。

ホームスクールは理想教育の代表のひとつ

日本人の国民性を考えれば、ホームスクールのように行政に頼らず親の手で子どもを教育するというやり方は、アメリカのように草の根式に口コミで年間数万人単位で普及していくということはないと思います。

ですが、理想的な教育のあり方のひとつとして、ホームスクールは学校やフリースクールと並ぶ重要な位置付けにあります。また歴史的にも、最も古くから行われてきた教育の仕方であり、最先端の教育資材を駆使していることを見れば、最先端の教育の方法ともいえます。

アメリカや、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドでは、国の教育予算を行政が運営する学校だけでなく、親たちが自分たちの自由で選んだホームスクールにも割り当てています。

このことから、学校しか今のところ教育の選択がない日本は、教育の自由がとても制限されているかがわかります。

周りの目を気にすることなく生きることは、難しいことです。でも、子どもに、自由にのびのびと生きて欲しいと願うのであれば、親が子どもに、社会の中で自由にのびのびと生きることとはどういうことなのかを、まず知り、実践し、体感してみることが大切です。

親自身が変わる --- 他人の気持ちを変えることはできない

子どもは、もう赤ちゃんでも幼児でもない

子どもが不登校になったとき、多くの親が陥るあやまち、子どもを自分の思い通りに変えようとする事です。

問題を抱えた子どもを、親は、子どもがまだ赤ちゃんや小さな頃と同じように、怒ったり、なだめすかしたりして圧力をかけ、自分の考えに沿うよう子どもに強制しようと試みます。かつてそれが可能だった頃のように。

ですが、もう子どもは、親の思うようになりません。

親は、焦ります。親は世間体を考え、親であるプライドを守るために、子どもにさらに圧力をかけます。

周りの人には親をとめられない

周りの人たちは、親が、子どもを自分の所有物のように扱っていると感じているかもしれません。子どもを人ではなく、物として扱っていることに危惧を抱いているかもしれません。

親の子どもへの言葉かけは、虐待とも取れるような激しいもので、周りは危機感をもち止めたいと願っているのですが、他人が口を出せば、親はさらに子どもに強く当たり、傷つけることを恐れて声をかけることができないでいるかもしれません。

落ちるところまで落ちる必要はないはず

親に誰もストップをかけることができないため、子どもは、ますます追い込まれ、自分の気持ちを言えなくなってしまいます。

そして、親が子どもを追い込んで追い込んで、子どもが心も体も動かなくなったときに、はじめて親は自分が子どもに何をしてきたのかに気が付きます。

底にたどりついてしまったので、あとは、這い上がるしかないということで、スタート地点に立てるには違いないのですが、本来なら避けるべき事態です。

子どもは、親の分身ではない

子どもの気持ちは、たとえ親であっても、強いて変えることはできません。子どもは、親から生まれてきても、親の分身ではないのです。血はつながっていても、他人であり、ひとりの人なのです。

人の心は、他人からのアドバイスや強制ではなく、自分が変えようと思ってはじめて変えることができます。たとえ偉大な人間が素晴らしいアドバイスをして、本人が変わる気持ちを持たなければ、変えられないのです。

親ができるのは、まず最初に親自身が変わることです。世間体が気になってもやり過ごせる親、他の子どもや家庭との比較は、自分の子どもにとっては意味がない、そんな、心が広くなった親を見たときに、子どもは、はじめて親の言葉を安心して受け止めることができます。

【4】そっとしておく期間

子どもが不登校になったとき、しばらくの間、そっとしておくほうが良いと、よく言われます。でも、これは、子どもの状態により、YESだったりNOだったりします。

NO そっとしておいてはいけない場合

もしも、子どもになんらかの障害がある場合、できるだけ早い時期に正しい診断を受け、そのあとのフォローも受けることが大切です。障害は、成長しても治ることはありません。

障害という診断を受けず成長した人たちはたくさんいます。そして、たまたま障害に関係がある本を読んで自分に障害があると気がついた人や、障害がある子どもを持って自分にも障害があることに気がついた人もいます。

世間には、何も気が付いていないほうが、本人にとって良いという考え方もあります。ですが、大人になって気がついた人たちの中には、周りからの無理解で、小さな頃からとても辛い思いをたくさん重ねてきたが、大人になり診断され、はじめてその理由がはっきりとわかり、やっと人生のスタート地点に立てたという人もいます。子どもたちに同じ思いをさせたくないという思いから、自分の障害を勇気を出して公表したり、障害についての理解が進むよう、積極的に支援活動にかかわる人もいます。

早期に障害への対応が行われれば、障害を補うことができるようになったり、子どもの可能性が大きく伸ばされたりするチャンスがあることは、研究でも証明されつつあります。また、周りの理解を得ることができれば、子どもも、そして、親も、もっと安心して毎日が過ごせるようになります。

YES そっとしておいたほうが良い場合

もしも、子どもに大きなストレスがかかっている、それが原因で不登校になった場合は、次のことが重要です。

- ・子どもの話、意見をひたすら聞く（親は自分の意見や一般論で子どもの話をさえぎってはいけない）
- ・子どもが、自分の心に整理がつくまで、そっとしておく。
- ・親は、世間体を気にして子どもに意見を言っていないか、振り返る。

YES でも、長期化は避けるべき

ただし、そっとしておく期間は、3ヶ月、6ヶ月、9ヶ月、あるいは1年以上にならないようになど、親自身が期間を設定しておくことをお勧めします。なぜかという、家の中にいる期間が長くなればなるほど、辛い反面、ぬるま湯の中にいるように親子が互いに居心地が良くなってしまい、外へ出る試みに不安を抱いたり、躊躇してしまったり、面倒を避けたくて、つい先延ばしにしようと思ってしまうからです。

あと、もう少し様子を見よう、あともう少しだけ、そう思っているうちに、数ヶ月が過ぎ、数年がたってしまうえば、子どもは、もう大人です。そのときに、親に良い案があればよいのですが、もしそうでなかったら、親は、一生子どもの面倒をみる覚悟をすることになります。

【5】再び外へ出る

人は、長期にわたり外の社会から離れてしまった場合、社会に復帰するには、次の3つが必要となります。

エネルギー

子どもが家の中にずっといる場合、その理由が、エネルギー充電のためなら、とても良いことです。ですが、エネルギーを充電できず、ひたすら消費し続けている場合、外へ出る前に、失ってしまったエネルギーをまず取り戻さなければなりません。

エネルギーは、失い続けている時間が長くなればなるほど、再び充電する時間も長くなり、社会へ戻るための準備期間もどんどん長くなってしまいます。

子どもにとって、外から与えることができるエネルギーは、家族の笑顔です。状況はとても大変なのかもしれませんが、家族が、少しでも明るく振舞っていれば、子どもは自分の中にエネルギーを少しずつ作り出していくことができます。

親が自分でエネルギーを充電するには、親が最初に外へ出ることです。散歩、気功、スポーツ、趣味のサークル、講演会、それはなんでもよく、自然や人から良いエネルギーを分けてもらいます。

勇気

外の社会から離れたと思うのは、以前に、人とのコミュニケーションがうまくいかなかったり、自分が無理をしすぎてしまったりすることから起きます。失敗経験をかかえたまま、一度、社会から身を引いてしまった場合、次に社会に出たときに、はたしてうまくやっていけるのかは、本人にとっては、いちばん不安なことです。

同じことを体験した人が家族の中にいれば、理解をしてもらえらという安心感がありますが、気持ちを分かち合える家族がいなかったり、ひきこもっていることに対し、不満をもっている人がひとりでも家族の中にいると、前へ一歩踏み出す勇気がなかなかもてなくなってしまうます。

親は、子どもに勇気を持って社会へ出て欲しいと愛情をもって、あるいは世間体を気にして願っているのですが、どちらも、子どもをますます追い込んでしまいます。子どもに勇気をもたせる前に、親は、自ら勇気をもつことが求められているのかもしれませんが、それは、子どもに見せるためのものではなく、自分自身が前を向いて生きていくためのものです。

第三者の助け

親の精神力や体力、経験には限界があります。子どもは、親の気持ちがわかっているだけに、なかなか自分の気持ちを上手に表現できないのかもしれませんが、そのことがさらにストレスの原因になってしまう可能性もあります。

親にとって大切なことは、協力してくれる第三者を探し出すことです。そして、その人の言葉を心を開いて聞くことです。これは、世間体や親としての自尊心、心の弱さが絡まりあって、とても難しいことなのですが、問題解決の重要な第一歩になります。

第三者とは、カウンセラーであるかもしれないし、地道にボランティアでサポートを続けている元不登校の親御さんかもしれません。お寺の和尚さんかもしれないし、元不登校経験者かもしれません。

問題が大きい場合には、十分な知識と経験、そして、トレーニングを積んだ専門家を探し出し、協力し合って、子どもの環境を整えていくことが最も重要です。

【6】きょうだいの反応

学校へ行くきょうだいの気持ち

ホームスクールや不登校をしているきょうだいを、学校へ行っているきょうだいが強くと非難する場合があります。学校肯定派のきょうだいは、上の子の場合が多いようですが、学校生活を自分なりに楽しみ、将来のために学校へ行くのは当然と受け止めています。責任感が強かったり、自分の意見をもっていたり、友達や先生からも一目置かれていることもあります。

家にいるきょうだいは、おっとりしていて優しく、感性も豊かです。はずかしがり屋だったり、おとなしかったりします。

きょうだいの性格は、まったく違っていたり、なぜか小さな頃から相性が良くないことも多いようです。

学校へ行っているきょうだいは、先生や友達から、家にいるきょうだいについて、「まだ家にいるの？ いつになったら学校へ来るの？」
「おまえからしっかり言ってやれ。お兄ちゃんなんだろう」
「家の人は、何も言わないのか？ 困った親だな」と、何度も繰り返し言われ、きょうだいのせいで、いやな思いをしていたり、プライドを傷つけられていると思っています。

家に帰れば、悩んでいる親ときょうだいがいて、学校から持ち帰ったストレスは、解消されるどころか、さらに蓄積されてしまいます。

親は、ただでさえ家にいる子どものことを悩んでいるのに、他のきょうだいが、その子を、そして親を非難してくることに困り、疲れ切ってしまいます。

家にいるきょうだいは、学校へ通うきょうだいの激しい攻撃から自分の心を守るのでせいっぱいです。

家の中からは笑顔が消え、混沌と、あるいは、殺伐とした時間が、いつ終わりを迎えるのかわからないまま流れ、重苦しい雰囲気にも包まれています。

親が出来る事

きょうだいの関係がぎくしゃくしてしまうことは、ホームスクールに限ったわけではありません。親が出来るのは、双方の意見や気持ちを受け止めてあげる事でしょうか。子どもを説得しようとしても、相手はひとりの「人」であって、小さなときとは違って、親の思う通りに変えることは出来ないのが現実です。

どんなときでも、ちゃんと話を聞いてあげ続ける、辛い仕事ですが、親の役目でもあるのかもしれません。もしも、親が聞く耳もたずであれば、批判する側の子どものストレ

スはますます高まって、とんでもない行動でそれを発散させてしまうかもしれませんし。

こぼれ話

知り合いに、ふたりの娘達がすでに30歳ぐらいの父親がいます。小さな頃は、激しい姉妹げんかで、頭が痛かったそうですが、大人になってからは、仲良く付き合っていました。でも、何かのきっかけで、長女が次女のしたことでプライドを傷つけられたと思い込み、妹を激しく批判。妹は泣いて父親に電話をかけてきたそうです。

第三者から見れば、たわいのないことで、長女がほんの少し肩の力を抜けばよいだけのこと。父親は、長女の性格を良く知っているだけに、さとするのは困難ということで、長女には何も言わず、次女の話に一生懸命に耳を傾けて励ますしかなかったと言います。

長女が、妹の気持ちを理解できるようになるのは、自分が子どもを持って、その子ども達がきょうだいげんかですりあうのを見たときに、さとることができるのか、あるいは、一生そのことをさとらないままなのか、これは誰にもわからないことだと思います。

【7】命にかかわること

子どもが死をほのめかすとき

学校へ行かなくなってしまった子どもが「死にたい」「生まれてこなければ良かった」ということばを言い始めたとき、親の動揺はとても激しいかと思えます。

そんなときに、最初に親は、まず自分との葛藤があります。親が葛藤している間に、子ども自身が問題を解決していくことがあります。そうでない場合、親は第三者に相談をもちかけようと考えます。

このときに、誰を相談相手に選ぶかですが、専門家を強く勧めます。なぜなら、たとえ子育ての経験が豊かな母親や教師であっても、十分な知識と訓練を積んでいなければ、対応は大変に難しいからです。

子どもが死を口に出し、それが長期期間にわたる場合、それはすでに子どもだけの問題だけではなく、親や夫婦関係がからんでいる可能性が高く、周りの人に相談をもちかけることは、プライバシーを公開することと同じになります。

相談される側も、死という重い問題をもちかけられた場合、解決策を持っていけばよいのですが、そうでない場合、親と同じように悩み苦しみます。

子どもが死を口にし、それが、深刻化する傾向があるのであれば、躊躇することなく、まず子どもではなく、親がカウンセリングを受け、家庭の中に何が起きているのかをはっきりさせることが必要です。子どもは、親に救ってもらえることを強く願って、つぶやいたり、親に直接言ってきたり、文字にして自分の気持ちを訴えています。

親が行動を起こすことで、子どもは、自分が救われる方向へ動いていることを実感できます。

病気のときに、医師から薬や対処方法をもらうのと同じように、心が苦しいときに、専門家から安心できるアドバイスをもらうこと。とても重要なことです。

Part4

【1】障がいのある子どもとともに学ぶ

学習障がい、多動、自閉症、アスペルガー症候群
コミュニケーション障がい

ホームスクールを始める理由

親が、学校ではなくホームスクールを選択する理由はさまざまです。本来は、学校へ行かせたかった、行ってもらいたかった、でも、事情によりホームスクールを選択するしかなかったという家庭では、たとえば次のような理由で、ホームスクールをはじめていきます。

「子どもが学校や他の子どもたちに理解してもらえない」

・学校へ通っていた子どもが、いじめられたり、先生に理解してもらえなかった。親としては、子どもには学校へ行ってもらいたいのだけど、子どもは傷ついてしまっていて、行きたくないといっている。ホームスクールは、やりたくて選択したわけではなく、これしかなかったのでそうってしまった。

「授業についていけない」

・子どもは、子どもなりに努力しているのだけれど、授業の内容にどうしてもついていくことができない。

・とても得意な科目がある反面、ぜんぜんできない科目がある。得意な科目と同じぐらいに、一生懸命に勉強すれば、成績もあがるように思うのだけど、本人は、できないという。

「学校でわが子の学ぶ姿を見て様子がおかしいと感じた」

・学校に参観して子どもの様子を見てみた。学校を楽しんでいなかったり、苦痛そうにしていたと感じた。見ていて、とてもいたたまれなかった。どうしていいのかわからないが、とりあえず、自宅で子どもの様子を見たい。

「障がいがある子どもに学校側からのフォローがない」

・学校や公的機関から、子どもに障がいがあるといわれた。でもそのあと、十分なフォローやケアをしてもらえない。今のままでは、十分な教育が受けられないし、本人の個性がつぶされてしまうと感じた。

子どものことで不安がある場合

子どもにこんな様子がある・・・

はじめての子育てで、いろいろわからないことがあり不安なのだけれど、どの親にもある不安なのか、自分だけがそうなのか、よくわからなかったり、上のきょうだいとは何かの違い、心配とを感じる場合、それはどんなことですか？

・はっきりわからないが、子どもの様子が、ほかの子と違うような気がする。
・小さいときから、とても育てにくいと感じてきたが、だんだんそれが強くなっていて不安がつのっている。

- ・学校で、他の子とうまくつきあいができなかつたり、誤解されることが多い。いじめにもあっているらしい。
- ・時間をかければ、完璧でなくてもそれなりにできるのに、学校のようにスケジュールにそって団体行動しなければいけない場所だと、いつも遅れをとってしまい、それで注意されたり、いじめられたり、勉強も遅れてしまう。

- ・感情に大きなゆれが出ることもあり、自分をコントロールできないことがある。
- ・とても賢く、やさしくて、良い子なのだけど、不器用なところがあって苦労したり、誤解を受けることが多い。
- ・体調を崩しやすい。特に、季節の変わり目など。そのときには、精神的にも相当に参ってしまう。
- ・とても素晴らしい集中力がある。でも、そのあと、疲れきってしまい、何もできなくなってしまうたり、ひどく体調を崩してしまう。
- ・いやなことや辛いことがあると、からだが動かなくなってしまうたり、ベッドの中にもぐりこんで固まったまま出てこなかったりする。

- ・子どもは、努力しているのだけれど、なかなか授業についていけない。
- ・得意な科目がある反面、苦手な科目があり、その落差が大きい。

- ・指先がとても不器用で細かい作業によくとまどっている。
- ・走ったりすると転びやすい。
- ・字を書くとき、線から上下にはみ出しやすい。
- ・運動神経はよさそうなのだけれど、動きが、ちょっと機械的な気がする。

もしかすると障がいがあるかもしれない

子どもたちの中には、家庭の中では、明るく、優しく、元気で、やりたいことを楽しんでいるのに、外に出ると、家族とは違った評価を受けたり、問題にぶつかりうまくやっ
ていけない子どもがいます。

もしかすると、LD（学習障がい）、ADHD（多動）、コミュニケーション障がい、アスペルガー症候群、そのほかの特定ができない障がいをかかえているかもしれません。

このような障がいは、まだ社会に理解されていないこと、研究もまだ十分に進んでいないことから、多くの誤解を子どもが、そして、親も受けています。たとえば、親の育て方が悪かった、本人が悪いなど、本人や家族を深く傷つける事態がたびたび起きていま
す。

これは、研究が進んでいないことから、十分な情報が社会に流れていないことから生じ
る問題といえます。

子どもに障がいというレッテルを貼ってしまうことへの不安

子どもに障がいがあったらどうしよう、障がいというレッテルを貼られてしまったらど
うしよう、親の苦悩や混乱は、人生始まって以来の困難とえます。そんなとき、他の
親たちはどう感じているのでしょうか。

- ・子どもに何らかの障がいがあると感じてしまうことがある。でも、検査を受け、障が
いというレッテルを貼られてしまったら、周りから変な目で見られてしまうかもしれ
ない。そんなことになったら子どもがかわいそうで、いたたまれない。
- ・学校から特別な扱いをされることで、いじめの対象になってしまうかもしれない。
- ・親が望まない対応をされてしまうのは嫌だ。
- ・検査を受けさせたら、障がいがあるといわれた。でも、そんなことは夫や祖父母にも

言えない、言いたくないし、ましては本人にも言えるわけがない。

・大人になったときに、障がいがなくなっているかもしれない。でも進学や就職のときに、子どものときに障がいがあったと認定されたら、子どもにとって不利になるかと思うと、診断を受けるのが怖い。

障がいということばは、とても重たい響きがあり、それを親が受け止めることには、正確な情報やたくさんの時間が必要です。

子どもに障がいがある親の選択

ホームスクールをすでにしている家族で、子どもに障がいがある場合、親はどうそのことを受け止めているのでしょうか？

どうしてよいのか、まだわからない家族

・もしかすると、成長すれば、だんだん他の子達と同じような生活ができるようになるかもしれない。だから、もう少し待ってみたい。

・閉鎖的な地域なので、子どもに障がいがあることが、近所の人や子どものクラスメイトにわかってしまうと、生き辛くなる。自分もどうしてよいのか混乱状態で、とにかくもうしばらく様子を見てみたい。

・あちこちの相談センターへ行ったが、たらいまわしにされ、とても辛い思いをしてきた。結局、はっきりしたこともわからず、対応も中途半端だし、信頼できる相談相手もみつかっていない。どうにかしたいのだけど、どうしていいのかわからず、困っている状態がずっと続いている。

どんな障がいがあるのかははっきりと診断してもらい、それを手がかりに最善の方法を探し出したい家族

・子どもにどんな障がいがあるのかわからないのは、とても不安。

・病気のために医師の検査を受け、病状をはっきりと診断してもらいたいと同じように、明確で正しい診断をしてもらいたい。正しい診断をしてもらえれば、病気の時なら、手術が必要かそうでないか、薬がいるのか、薬が必要なら、どんな薬をどのくらい、どのくらいの時間おきにあげたらいいのかわかる。

それと同じで、きちんとした判断をしてもらえれば、親も不安を少しは解消できるだろうし、対処の方法がわかれば、何もわかっていない子どもに不安な思いをさせずにすむ。

検査は、お金も時間もかかって大変だけれど、親としてできる最善の方法を今、探したい。

障がいがあるとは考えていない思いっきり前向きの家族

・子どもの様子を人に話すと「それは障がいですか？」と聞かれて、戸惑うことがある。それはあくまで本人の個性や持ち味で、障がいという言葉には抵抗がある。子どもは、確かにそのことで困ることもあるようだけど、好きなことや、やりたいことを楽しんでいるし、本人も、あまり気にしていないと思う。

・子育てしていて始めて気がついたのだけれど、世間から障がいと言われるようなものを自分もどうも抱えているらしい。でも、学校にも行ったし、就職もしたし、結婚して、子どもにも恵まれ、普通に暮らしているので、障がい?? だからなんなのかし

ら？って思う。

他にも色々な家族がいて、どの選択をするかは、その家族や子どもによるのですが、最終目標は、「子どもの幸せ」なのは、どの家族にも共通することです。

情報、人、そして、親が変わる

子どもに障がいがあるかもしれない、または障がいがあるとわかったとき、戸惑う親にとって助けとなるのは、情報と人、そして親自身が変わることです。

情報は力なり

図書館や書店、インターネットでは、最新の情報がたくさん出ています。勉強会や講演会は、インターネットや、新聞のイベント欄でチェックできます。

知識を得ることは、何も知らない状態よりも、安心感を得ることができます。情報の中には、間違ったものもあれば、自分たちのケースにはあてはまらないこともあります。どの情報を取るのか捨てるのか、地道で手探りの作業の繰り返し、最初の一步への手がかりになります。

人にめぐり合う

信頼できるカウンセラーや医師に出会えることは、その家族にとってはとても重要なことです。人との出会いは、縁が、その後、続けておつきあいができるかどうかは相性によります。

人探しは、とても大変なことです。必ず最後に、その人に会えると信じて、探し続けることが重要です。なぜなら、子どもには、まだ自分で信頼できる人を探し出す力がないからです。親だからこそできることです。

【2】米国サポートシステム

ホームスクーラーが100万人から200万人いると言われているアメリカでは、ホームスクールの家族を支える様々なサポートがあります。

大きくは、仲間同士のグループであり、公立学校のホームスクール プログラム、そして、私立学校が提供するパートタイム プログラムがあります。

1) 仲間同士の集まり

カリフォルニアのある地域で、軽度障がいのある子どもをホームスクールで育てている親たちがいます。子どもに人との係わり合いに困難があること、学習に障がいがあることから、ホームスクールを選択しています。

教育に熱心な親が多く、できる限り良い教育を与えることができるよう努力しているのが共通点です。子どもたちが、人との係わりに参加できるよう、それぞれの家に不定期ですが集まって、食事をして遊んだりしていますが、定期的に関いたり、代表者がいたり、順番性があるわけではなく、ゆるい集まりになっています。

生活に必要な家事については、どの親もそこまで手が回らなかつたり、学習を優先してきたことから、手をつけていなかったのですが、最近、ひとりの親が提案し始めたこ

とから、少しずつやってみようかという雰囲気がありました。

親たちの中には、元教師で、学習障がい特に専門という母親がいたことから、他の親たちは、個人的なアドバイスを受けていました。

学校とは違い、ふだんの子どもたちの様子を良く知り、また親の育て方や考え方なども理解している学校以外の仲間からのアドバイスは、大変にきめの細かいものでした。また、献身的な母親だったことから、電話相談も長時間にわたることもありましたが、快く受けていました。

2) 公立学校のホームスクールプログラム

この家族らの地域は、公立学校にホームスクールのプログラムがあります。親がホームスクールのプログラムに登録をすると、小学生グループ約30人にひとり、中学生グループにひとり、教師の資格をもったスタッフが、それぞれの子どもにあった学習スケジュールをたてるサポートをします。

高校生年齢は、ホームスクールプログラムはなく、高校に入るか、通信制の高校を選択します。

スタッフは、ホームスクールの家族を支援するため、学習面だけサポートだけでなく、親がボランティアでダンスや音楽などの先生役をつとめるときには、会場を予約したり、軽い飲み物やスナックを準備したりします。

障がいのある子どもは、学校で個別のカウンセリングを受けることができます。それは、字を字を書く訓練であったり、人とコミュニケーションするために必要な訓練であったりしますが、あくまでも学習面をサポートすることを目的としています。

芸術面に関しては、確認できなかったのですが、親は自分たちで子どもに楽器を習わせたり、合奏グループに参加させていました。

学習は、勉強が大好きな子どもは、朝から晩まで机に向かっていました。子どもによっては、長時間の集中学習は難しいことから、数学や英語など、基本学習に絞って親が勉強を見ていましたが、わが子ということで、互いに気持ちをコントロールするのが大変だったようです。

ある女の子は、音楽が得意で、演奏会で賞をとったり、合奏グループの中でもかなり活躍していました。

教科書や、問題集の配布も無料で受けられ、教科書を利用している家族にとっては、教科書代が高額なアメリカでは、親の経済的にかなり助けられています。

3) 私立学校のプログラム

これはボストンのケースです。ある母親は、息子が3歳ぐらいのときに、学習障がい、または何らかの障がいがあることに気が付き、ホームスクールで子どもを教育することを決めていました。

元教師であったことから、小学生年齢になると、忍耐強くひとつひとつの許可を教え始めました。

音楽に興味もてるように、人とのコミュニケーション作りにと、鈴木メソッドでピアノを習わせ始めました。子どもは、驚くほどに上手にピアノを弾けるようになりましたが、残念ながら音楽への愛ではないようなので、プロになることはないだろうと親は語っていました。

8歳ぐらいになり、学習面はとても充実していました。そろそろ、集団の中でもやっていけるだろうということで、週に何度か学校へ通わせながら、ホームスクールをやっていくことにしました。

いくつかの公立、私立を見学しましたが、最終的に、家から近い私立にしました。そこは、人気が高い小学校で、1年間、ウエイティングリストで待って、やっと入ることができました。

その子どもの場合は、途中からの転入ですが、新1年生からの入学は、生まれたと同時に入学を申し込まないと入ることが出来ないというぐらいの人気でした。

小学校は、一学年が2クラス程度でひとクラス25人程度です。

男の子は、そのクラスとは別の、少人数制のクラスに参加していました。ひとクラスは、6~7人で、二学年が一緒になっていました。学習に障がいのある子ども、免疫が弱く病気がちで学校を長期にわたって休まなければならないことから、学習が遅れがちの子どもたちも、混じていました。

担任の先生はひとりですが、教育委員会から、障がいのある子ども専門の教師が巡回で回ってくるため、時間帯によっては、先生が二人になることもありました。

男の子は、週に3回ほど、午前中だけの通学でしたが、本人の希望で、1日、学校にいても可能でした。

学費は、出席回数や学習時間によって減額になります。出席回数などは、親が決めました。

郊外学習やイベントなど、子どもが希望すれば、参加は可能でした。

【3】米国 17歳の少女の体験

学習障がいにはマンツーマン教育

これは、アメリカで出会ったホームスクールの家族のことです。

子どもの障がいに親が気づく瞬間

17歳と14歳の女の子は、ふたりとも障がいをもっていました。長女は、学習障がいがあり、次女は、もう少し重い障がいがあり、知らない人とのコミュニケーションは難しそうでした。

長女は、小学4年生になるまで、公立の学校へ通っていました。

親は、先生から学校の呼び出しを何度もくらっていました。
「あなたのお子さんは、勉強する気がぜんぜんありません」

母親は、長女は小さな頃から、色々なことをするのに時間がかかるとは思っていました

が、家では、楽しそうにしていたことから、成長すればやがて普通に育っていくだろうと、あまり気にせずいました。

ですが、ある日、あまりにも先生から強くひどい言い方で批判されたため、長女の宿題をいっしょにみてやることにしました。

ところが、勉強を始めたとたんにとりわけ愕然としてしまいました。教科書に書いてある単語の意味がぜんぜんわかっていないようなのです。

もしかすると、たまたまその言葉の意味を知らなかったのかと思い、辞書をひくように言いました。すると、長女は、辞書が何かということがわかっていないようでした。

様子を変だとは思いつつ、辞書をもってきて、単語を調べるように言いました。ところが、辞書の使い方がわかっていませんでした。

そこで、A B C 順に調べるように言ったのですが、A B C がわからないと言います。

最初は冗談かと思い、勉強がいやでふざけているのかと思い、腹を立ててしまいました。

ところが、様子を良く見てみると、冗談でも、ふざけているわけでもなく、本当にわかっていないらしいのです。

試しに、Cake ケーキという単語を調べるように言いました。すると、
「ケーキって何？」
と質問されてしまいました。そこで、母親がケーキの意味が書いてあるところを読み上げました。それでも、長女はわからないと言います。

ケーキにもいろいろな種類があることから、どのことを言っているのかわからないのかもしれないと思い、ケーキの書いてある絵を見せました。それでも、長女は、ケーキがわからないといい続けます。

そこで、ついに母親は、娘と一緒にケーキ作りを始めました。いっしょに材料をそろえて、計って、混ぜて、焼いて、オーブンで焼き上げ、お皿に切り分け、一緒に食べ、
「ね。ケーキって何かわかったでしょ？」
と聞いたら、それでもわからないと言うのです。

このときになって母親は、娘に何がおきているのかを始めて知りました。そのショックと動揺は、何年たっても忘れられないものでした。

ホームスクールの推薦してくれたのは学校の先生

学校に何度か出向いて、状況を説明し、なんとかして欲しいと頼みましたが、まったく相手にされませんでした。

夫婦で思い悩んだ挙句、事情を理解してくれる私立学校を探して、そこへ入れることにしました。たくさんの学校を見た後、車で1時間半以上かかるものの、長女のことを理解してくれ、きちんとした指導をしてくれる学校を見つけました。

最初の1年は良かったのですが、母親に持病の喘息が出るようになり、長女の学校への送り迎えが難しくなってきました。通学は、毎日から、月に数度になっていきました。

深く悩む母親に、長女の担当の先生がこうアドバイスしてくれました。
「ホームスクールをしてみたら、いかがですか？」

教育委員会との戦い

今でこそ、アメリカではホームスクールが当たり前に認められていますが、当時は、法律で認められてはいたものの、教育委員会は、ホームスクールを異端とする時代でした。

家の中に入り込み、娘を学校へ連れて行こうとする教育委員との間に攻防戦が始まりました。

教育委員が尋ねてくる日には、夫といっしょに、玄関に机といすでバリケードを築き、一步も入らせまいという戦いでした。

そうこうしているうちに、ホームスクールが、だんだん社会に受け入れられていくようになり、教育委員会も、裁判で戦いになったとき、不利な立場におかれるようになったことから、強硬手段で迫ることをあきらめたようです。

生活に必要なことを学ぶ

子どもの教育は、教科から勉強するのではなく、生活に必要なことをするために必要なことを学ぶという方針でした。

長女は、将来、親元から離れて自活して生活できるように、母親から料理を習い始めました。
材料を売っているスーパーへの行き方、スーパーでリストにそって物を買うときには、ひとつひとつの値段を確認しながら買い物かごにいれました。

アメリカは、果物や野菜は、パックではなく、ほとんどがバラで量り売りされています。重さ当たりの値段の表示を見ながら、リンゴを5つ買ったなら何ドルかかるという計算をしながらの買い物です。

ケーキ作りも、小麦粉の量が、カップ表示のものと、重さ表示のものがあります。それを換算するときには計算が必要で、必要に迫られて加減乗除、小数計算を勉強していきました。

地道な勉強の積み重ねが、毎日毎日、行われていきました。

パーティの買い物で日ごろの努力の成果を発揮

長女が15歳になったとき、高校生のパーティに参加しました。大人たちは、参加している高校生たちに、お金を上げるので、参加者全員分のスナックを買ってくるように言いました。

ところが、そこにいた高校生たち、そして大学生も、何をどのぐらいの量、買っていいのかわからなかったので、行きたくないと言い出し、誰一人として、買い物に行こうとしませんでした。

そこで、彼女がひとりでお金を預かり、買い物に出かけました。参加者の人数に、ひと

りあたりのスナックと飲み物の量を掛け、合計金額が、預かったお金で間に合うように品をそろえました。そして、大きな買い物袋をひとりで両手に下げて、会場まで戻り、それをみんなに行き渡るよう、セッティングまでしました。

大人でさえ、初めてのパーティ会場でいきなりお金を渡され、ひとりで全員分のスナックを買うように言われたら、かなり動揺すると思います。

そんな大役を無事にこなし、家に帰って家族に報告した長女の立派な行動に、母親と父親は、自分たちが模索しながらやってきたことに、勇気を得たようです。

自立への道 運転免許を取るための2年の準備期間

わたしたちがその家族に出会ったとき、長女は17歳でした。半年後には、車の免許を取りたいので、そのために勉強していると言っていました。

運転教本が教科書で、単語をひとつひとつ確認しながら、意味を理解する、そんな作業が過去1年半続いてきたと言います。2年間かけて、運転免許を取るという大きな目標でした。

アメリカは、車社会なため、車の免許を取ることが、子どもたちの自立への第一歩になります。そんなこともあり、車の免許取得は、学校の卒業証書をとることよりも、その家族にとっては大きな目標になっていたように思います。

障がいという困難があるけれど、小さな試みと成功を家族みんなで重ねていくことで、自分たちは、やればできるという確信が、誰の心の中にもあり、家族の絆を強く感じました。

母親を支えてきたのは夫とホームスクールの仲間

家族には、もうひとり長女より重い障がいのある次女がいたことから、母親の努力は、並大抵ではなかったと思います。そんな彼女を支えていたのは、父親でした。でも、その父親も、体調が悪いことが多く、苦労は計り知れなかったと思います。

さらにその家族をささえていたのは、ホームスクールの仲間たちでした。ほんの数家族でしたが、どの家庭も、子どもが望む形で学習をさせるタイプで、共同で1年分の食料用の肉を圧縮なべで煮込んで、二日がかりで瓶詰めにしたリ、料理を作ったり、四季の行事に使う小物をみんなで作ったりして楽しんでいました。

アメリカのことですから、仲間同士が住んでいる家は、車で1時間以上は当たり前でしたが、みんなが集まるときに、無理なく楽しく活動をしていました。

親の思惑によってホームスクールのやり方はさまざま

ホームスクールでは、学校型の勉強を取り入れる家族もいれば、生活に即した学習内容を取り入れたり、子どもの興味関心を重視して、やりたいことをやらせるなど、いろいろなタイプがあります。

どのやり方を選ぶかは、子どもが大きくなったとき、どうなって欲しいかだと思うのですが、親の思惑によって、選択が違ってきます。そして、そんな選択も、子どもの希望や成長、家族の状態によって、変化したりもします。

人生が、ひかれたレールの上をまっすぐ進むことがありえないのと同じに、ホームスクールも、紆余曲折ありながら、家族史に足跡を残しながら、進んでいきます。

【4】1人で悩まないで！

(* 不登校の「ひとりで悩まないで」から転載)

不登校や、子どもの様子が他の子どもとちょっと違っているようで不安に思ったり、何か障害射があると思えたりしたときには、できるだけ早く相談機関を訪れることは、問題を解決したり、次のステップへ進むために、親子にとって大変に重要なことです。

多くの親は、最初に地元の教育委員会、児童相談所、不登校の親の集いやフリースクールを訪れます。ですが、まだシステムが整っていなかったり、専門家が常駐していなかったり、家庭の方針とあっていない場合が多く、たらい回しにされたり、自ら渡り歩いてしまうケースが多くを占めています。

最初に訪れる機関は、正確な情報と的確なアドバイスや診断が受けられるところを選ぶ必要があり、そのために下調べをしておくことは重要です。

都道府県レベルの教育研究所や教育センター

- + 不登校に関する相談を受け付けている
- + 臨床心理士がいる
- + 優れた専門家が多い

国立・公立大学、市立大学

- + 教育相談を行っている研究室がある
- + 無料（ただし一部の機関は有料）
- + より専門的に研究、実践している教授がいる

県立病院、赤十字、大学付属病院等

- + 専門カウンセリングが受けられる
- + 思春期外来があれば、医療面からのケアも受けられる
医療費がかかる
私立病院は、思春期外来がない病院が多いので事前に確認
有名で評判の良い医師は予約を取るまでに大変に時間がかかる。

・・・上記機関について

場所が遠いと、通うことが大変。ときには泊りがけになることもあり、いろいろな面での負担がある。

担当者によって、立場や、方針、考え方、学問的立場などがあることから、家族の考え方や方針とあっていないかを検討する必要がある。

教育研究所リスト

日本発達生涯教育研究所サイトから

<http://www.ne.jp/asahi/jasedd/2000/siryous/s-04-02.htm>

各センターの仔細については、国立特殊教育総合研究所の「教育案内」「教育相談機関案内」にあります。

http://www.nise.go.jp/blog/Soudan_Top.html

国立、公立大学リスト（文部科学省サイトから）

http://www.mext.go.jp/b_menu/link/daigaku.htm

国立病院リスト（独立行政法人 国立病院機構サイトから）

<http://www.hosp.go.jp/shisetsulist.html>

赤十字病院リスト（日本赤十字社医療センターサイトから）

<http://www.med.jrc.or.jp/link.html>

大学病院リスト（ほすりくねっとサイトの左側フレーム内の「大学病院リンク」をクリック）

【5】きょうだいのこと

障害ある子どものきょうだい

複数の子どもがいて、ひとりが障害を持っている家族のホームスクールには、いくつかタイプがあります。

最初の子どもにやや重い障害がある

親は、初めての子育てということで、わからないことが多く、必要以上に子どもに手をかけてしまいがちです。衣服の脱ぎ着、入浴、食事のさいの介助など、本当なら本人に出来ることも、教え方がわからなかったり、「この子にはまだできない」という思い込みから、ついつい手伝ってしまいがちです。

下の子どもたちは、親が、上の子にかかりっきりのことが多く、必然的に自分で何でもできるようになります。このため、親は「手がかからなくて助かる」と思いがちです。

さらに、

「この子なら、上の子と親の大変さが理解できるだろう」

「この状況を理解して欲しい」

と、無意識のうちに思いがちになり、下の子達への愛情のかけかたは、傍目から観てもわかるほどに上の子とは違ってきます。そして、親もそのことには気が付いているのですが、それでもしより手を必要としている子どもに神経を集中させてしまいがちです。

障害のある子どもは、下の子達が、自分のことで寂しい思いをしているということに気がつくことが難しく、親に気づかせたり、下の兄弟をきづかうことができずにいます。

下の子どもたちは、事情がわかっているだけに、親に、自分ももっと愛して欲しい、かまってほしいとは言えず、寂しさや嫉妬、それを我慢しなければいけない良心との葛藤をかかえて育ちます。

上の子のことで、手一杯の親は、上の子をホームスクールで育ててはいても、下の子にホームスクールをするほどには、心の余裕がないため、下の子ども達は、学校へ通うことが多いようです。

また子どもたちの中に何人か障害がある場合も、いちばん障害が重い子どもに時間をとられてしまうため、他の障害のあるきょうだいも、ホームスクールが良いとわかっていても、学校を選択せざるを得ないこともあります。

最初の子どもに軽い障害がある

最初の子どもに軽い障害がある場合、それが原因で不登校になってしまうことがあります。

親は、子どもに障害があることに気づいていなかったり、気づいていても、成長と共に良くなると考えているかもしれません。

原因は、はっきりとわからないのですが、二人目、三人目も、不登校になることがあり、親もどうしてよいのかわからず、そのままの状態がずっと続くことがあります。

きょうだいのなかで一人でも楽しくホームスクールができるような状況であると、親はほっとします。他のきょうだいも、それがきっかけで、自分なりのホームスクールができるようになることもあります。

一方、自分がきっかけで、他のきょうだいもホームスクールになってしまった。でも、そのきょう代いは、ホームスクールを楽しんでいるのに、本人が、ホームスクールを楽しめないというケースがあります。

子どもに、なんらかの障害があると親は気が付き、カウンセラーや医師のところ連れ行ってはいるのですが、子どもにとっての「本当の専門」ではないため、十分な診断やカウンセリングが受けられず、中途半端なたちで通うのをやめてしまうことが多いようです。

また、あちこち、ホームスクールや不登校のグループ、カウンセラーを渡り歩き続けているにもかかわらず、どうしても最終的に信頼できる専門家に出会えずにいたりします。

アドバイス： 子どもの良い専門家がみつからない場合は、親のための良いカウンセラーを探し出すことが、近道の一步になることがあります。

ホームスクールで上の子達を育ててきたが、いちばん下の子に重い障害があり、上の子達を学校へ行かせたケース

最初の子どもが、いじめが原因でホームスクールをはじめ、そのあと、3人の子どもをホームスクールで育ててきましたが、5人目の子どもが、重い脳性まひだったことから、その子どもに集中的に教育を与えるため、上の子達のホームスクールをあきらめ学校へ行かせた家族がいます。

上の子どもたちは、ホームスクールから学校への転入を残念がっていましたが、全員、学校にはうまく適応し、それぞれ満足して通学しています。

脳性まひの子どもは、親がホームスクールの経験を蓄積してきたことから、心身ともに重度であるにもかかわらず、小さな進歩ながらも学習に成果をあげています。

学校から障害をかかえた子どもに対する学習におけるアドバイスが受けられるよう、プログラムに登録をしています。

上のきょうだいたちは、ホームスクールをしていた頃に、十分に手と目をかけてもらったこと、年齢的にも、自立へと向かっていたことから、親といちばん下のきょうだいの良き理解者となっています。

周りからの支援を受ける

他にもいろいろなケースがあります。親は、親だけでホームスクールをするのではなく、回りからの支援を受けられるようにすることが、その子、親、そして、きょうだいにとってホームスクールをしやすい環境となります。

障害のある子どもに、必要以上に手をかけないようにすることは、当事者にとっては難しいことなのですが、第三者の介入は、重要な助けになります。例えば、何が子どもにとって本当に必要で、何が手伝いすぎを教えてもらうことで、必要以上に時間をかけたリエネルギーを費やしていた分を、他の事にまわしたり、他のきょうだいに目をかけることが出来るようになります。

ときには、子どもを他の人に預け、他のきょうだいとだけで買い物へ行ったり、習い事やスポーツ大会の合宿に泊りがけで出かけたりして、特別な時間を他の子どもたちとだけで共有することも大切です。

買い物先から、旅先から、家にいる子どもに電話をかけたり、絵葉書を出すことは、家族全員の楽しみや良い思い出になります。

カナダでの話ですが、14歳の重い小児麻痺の子どもを人に預け、その兄のスポーツ大会の遠征旅行に1週間出かけた夫婦がいます。ボランティアとして、他の子どもたち40人のサポートをするためです。

日本人としては、そんなことは後ろめたいと思ってしまいがちですが、親離れ、そして、子離れのための小さな練習の積み重ねは、子どもが小さなうちから、子どもにも親にも必要です。

子どもとの距離をとることは、自分を客観的な立場におく良い機会です。もしかすると、子どもも、24時間、親に見守られていることに窮屈さを感じているかもしれません。

子どもに障害があっても、なくても、子どもは、いつかはひとりの人として自立しなければいけないのです。そして、親もまた、子どもを自立させることで、親としての役目をいつかは卒業すると考えていかないと、気持ちを保ち続けていくことが辛くなってしまいかもれません。

【6】欲しい！公的プログラム

公的機関が提供すること

親が教科学習を子どもにさせたいという希望があっても、教授法や教材の使い方や存在を知らない場合、困難さが伴うことがあります。

学習障害や多動、自閉症、アスペルガーの子どもたちは、専門的な知識をもった人から、学び方を学んだり、感情のコントロールの仕方を学ぶことで、より教科学習が進めやすくなります。

このことから、公的機関は次のことを、それぞれの家族に提供します。

- ・教科書とその副教材。無料配給の教材と、学校が推薦する有料教材、またはその情報提供
- ・子どもの能力と個性にあった年間カリキュラムの提案と作成支援
- ・学習の指導法の教授
- ・学習効果を評価するための試験の実施と評価、記録保管（親が希望した場合）
- ・卒業証書の発行
- ・障害のある子どもへの検査、判定、カウンセリングやトレーニングの実施
- ・学校で行われるイベントや課外活動への案内、参加のためのコーディネート
- ・進路指導
- ・ホームスクーラー同士の交流の推進

ホームスクールのプログラム実施のため、専門のスタッフを配置することが必要です。さらに、障害のある子どものカウンセリングやトレーニングを担当する専門家（臨床心理士、行動療法士ら）とのスケジュールの調整も必要です。

ホームスクールプログラムへの登録

学校のホームスクールプログラムに参加するためには、各家庭が、教育委員会、または、実施校に登録することが必要です。（学校が、学校側の裁量で登録をすることはできない。あくまでも親の判断に基づく）。

親は、プログラムが十分なサポートを提供できない場合、学校長にプログラムの充実化の検討をを図ることを要請する機会を持ちます。

学校側は、親の要請に対し、回答をする責任を負います。

親は、担当スタッフの協力をえて、学年の始めに、学習スケジュールを作成します。その後、毎月一度、面談を行い、スケジュールの進捗の確認や学習について質問があればアドバイスを受けます。

親は、学習上の質問があれば、電話やメールで質問を行うことができます。

子どもは、質問があれば、いつでも担当スタッフに聞く事ができます。それは、直接、会ってしてもよく、電話やメール、手紙でも可能です。

学習の場は、家の中だけでなく、旅行先でもよく、子どもは、メールなどを通して、担当スタッフから必要に応じてアドバイスを受けることができます。

学校への復帰

家族がホームスクールをしてみたけれど、なかなか思うようにいかなかったり、子どもが学校へ戻ることを希望するとき、学校側が、それをスムーズに受け入れられる体制作りも必要です。

ときには、子どもの事情によって、子どもや家族が、学校とホームスクールの間を行き来することを希望するかもしれません。

学校側と家族の間の橋渡しである担当スタッフは、その橋渡し役となります。

経費的なこと

公教育を受ける子どもひとりあたりに、年間200万円以上が税金から投入されています。

施設費など、通学する子どもたちに比べ、ホームスクールの子どもは、経費がかからないことなどを考慮すると、年間ひとりあたり、数十万円を受け取る権利が発生しても良いのではないのでしょうか？

アメリカ、カナダ、ニュージーランドでは、ホームスクールプログラムに登録をしている子どもひとりにつき、年間、数万円から数十万円の補助金が下ります。

補助金は、教材の購入、家庭教師の雇用、親が教授法を学ぶための講習費、障害の専門家への必要経費にあてることができます。

教育委員会は、ホームスクールプログラムを実践する場合、このような面の検討も提案されます。